
僕たちの挑戦

尾道貴志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕たちの挑戦

【ZPDF】

N1208V

【作者名】

尾道貴志

【あらすじ】

「あなたの夢を私が叶えてあげる」そんな魔法の言葉にとまどいながらも、少女たちは自分の夢を追いかけていきます。よかつたらちょっとだけ応援してあげてください。

FC2ブログ（僕たちの挑戦）にて同時進行で連載中です。毎週金曜日更新（予定）

僕たちの挑戦 <http://garakutakan2012> ·

b
l
o
g
·
f
c
2
·
c
o
m
/

喫茶 「がらくた館」

1 喫茶 「がらくた館」

カラカラカラ

乾いた鈴の音とともに扉が開きゆるやかな風が舞い込んできた。
風と一緒に飛び込んできたのはユカ。日に焼けた肌に曇下がりの陽
射しが眩しい。

「マスター こんにちは！」

「いらっしゃい、ユカちゃん。あれ学校は？」

「なに言つてるの、今日からな・つ・や・す・み」

「そうか、そりやおめでとう、健全な小学6年生よ」

「ありがとう。これ『ハハ』からの差し入れ、田舎から送つてきた
モモだつて」

「おお、これはまた、かたじけない」

「何にする？」

「オレンジジュース

「通信簿の出来悪かつたんだ」

「えつ、何で分かるの？ ポーカーフェイスに自信あつたのに」

「ユカちゃんが機嫌のいい時はレモンティー、それでもつて落ち込
んでるときはオレンジジュース」

「うぬ、やるなおぬし、さすがプロ」

「おほめいただき光榮です。数あるお客様の中でも小学生の常連
さんはユカちゃんだけですからね」「

喫茶「がらくた館」は小さな港を見下ろす山の山麓から少し登つ
た所にある。坂道だらけの町は石畳が連なり、旅ゆく人の心を懐か
しい気持ちにさせてくれる。店のすぐそばには観光用のロープウェ

イ、山の頂上からは青い海と緑の島々、眼下の港はまるで「ニーチュアセット」のようだ。

「ね、マスター、ちょっと相談があるんだ」「うーん、どうじょうか。タダつてわけには……」

「いじわる！」

「あとで リムーまで買い物頼もうかな」

「リムー」は坂道を5分位下りたところにあるフルーツショッピング。この店のレモンの味は格別、酸味と苦みと甘味のバランスが絶妙だ。こんなに「素敵な」レモンにはなかなかお目にかかるれない。ちなみに「リムー」はペルシャ語で「レモン」の意味。店の主人はアラビアマニア、果物のPOPがアラビア語で書かれてある。「なんて書いてあるか読んで！」と頼むと機嫌がよくなりレモンをおまけにくれたりする。

「了解」

「よし、交渉成立、で何なの相談つて」

「うーん 信じてもらえるかわからないんだけど……不思議なことがあつてね……」

「……」

「誰にも言わないって約束してくれる？」

「ふむふむ」

「マスターなら私より人生長く生きてるし、いろんな経験もしてるのでしょ、お客様の相談にも乗ってるだろうし」

「なるほど、でもユカちゃんは一つ大きな勘違いをしてる」

「えつ何？」

「この店ができるくらい？」

「えーと、あたしが6年生になつてからだから……3か月……」

「だから僕もマスター3か月」

「えつ、うそ、ほかの場所でずっとお店やつたんじやないの」「いや、初めてだよ」

「だつて、注文で私の気持ちを当てたり そつは思えないけど」「だつて、コ力ちゃん開店してから2日で一度は来てるだろ、がらくた館の最初の常連さんてわけ」

「常連さんて言わると嬉しいけど、家が隣だからだよ、私のお小遣いじや週に一度しか注文できなし」

「いいんだよ、毎日のようすに顔を見せてくれればそれで常連さん、今日だつてモモもらつちやつたし」

「そつか、わたし常連さんなんだ」

「前は何やつてたの?」

「サラリーマン」

「へー、なんで辞めちやつたの?」

「50歳になつた記念に

「ずっとサラリーマン?」

「つうん、ちがうよ」

「その前は何やつてたの?」

「学校の先生」

「つつそー ちょっとだけ衝撃

「何で、見えない?」

「うん、見えない」

「どうして」

「見た目もヒゲ面だし、イメージ合わない!」

オレンジジュースの氷が溶けてカラーンと音を立てる、窓の外からは船の汽笛の声がゆるやかに忍び込み、2人の会話をほんの少しの時間だけ止めてみせた。

「ところで何だつて、その不思議な出来事つて」「うん・・自分でお願ひしといて何だけど、話そつかどうかどうかひょ

と迷つてゐる・・・

「どうして、だい？」

「夢みたいな話だし、それにちょっとびり怖い・・・」

「いいよ、僕もちょっと興味がわいてきた、話す気持ちが固まつてからじつくり聞くから」

「ありがと、じゃ、買い物先に行つてくれよ」

「わうだね、夏の太陽をいっぱい浴びておいで」

ユカはショートカットの髪を軽く揺らすとリムーへ向けて駆け出していく。坂道の下では夏の光に輝くレモンたちがユカを待つていたかのようにキラキラと笑顔を見せた。

「サラーム ユカちゃん」

「サラーム おじさん!、ペルシャ語覚えたよ、『ハニハナ』で
しゃ」

「おっ、うれしいね、今日は何をお求めで?」

「レモンを20個、がらくた館のお使いなの」

「そりゃ感心、ではひとつおきのエメラルドレモンを一つおまかしておこひ」

「ありがと、わっ、きれい!」

「持つてこると幸運が訪れる」

「信じるーじゃ、また来ます」

カラカラカラーン

「お帰り」

「ただいま、はい、これレモン、おじさんおまかしてくれたよ、

「わたくしはペルシャ語しゃべつたね?」

「ハヌクン!」

「ハナクン!、エメラルドレモンだね」

「うん、持つてると幸せになれるんだって」

「それは素晴らしい」

「マスター、気持ちの整理がつきました、話を聞いて下さい」

「はい、お待ち申しておりました」

放課後

2 放課後

「ユカ、成績どうだった？」

「うーん・・・かなり微妙」

「しーちゃんは？」

「頑張ったわ、これで夏休みに//ユージカル教室に通わせてもらえた
ると思う」「う」

「よかつたじゃない、約束果たしたんだ、すごいね」

「必死だつたもん。オールA取れたら//ユージカル教室、呪文みたい
に唱えてた」

「おめでとう、やつたね」

「ありがとう」

ユカの小学校の通知表は小学校では珍しい5段階評価。AからE
までのアルファベットがにぎやかに並ぶ。各科目に4つずつの観点
があるのでオールAともなれば32のAが並ぶことになる。「5年
生と6年生はしっかりと自分の学力を自覚して、中学に行つて困ら
ないよう」、「という校長先生の考えだそつだ。

「あたしはオールCにBがちらほらとこつた感じ、ちょっと帰るの
気が重いな」

「夏休みは講習？中学受験するんでしょ」

「うん、せつかく小学校最後の夏休みなのに、ほとんど遊べないと
思うとね」

「テニスは？」

「合格できるまではお預けかな」

「しーちゃんはずつと//ユージカル？」

「あさつてから全部で30日間、途中でプロの公演も見られるし、最後にはオーディションがあるので、でも、安心して、サマーキャンプは行くから」

「よかつた、あたしもキャンプだけは参加させてもらえそう、何しろみんなで行ける最後のキャンプだからね」

毎年行われるサマー キャンプにユカたちが参加したのは1年生の時、この時に親しくなった5人組で毎年欠かさず参加してきた。最初は母親同士のつながりから始まったキャンプも4年生からは自分たちで出し物を考えたりオリエンテーリングコースを決めたりと夏の最も楽しみなイベントとなつた。

「よつ、お待たせ」

「お、来たな3人組」

「さあ夏だ、キャンプだ、お祭りだ」

「野球の合宿は大丈夫なの？」

「おう、危なかつたけど一日ずれてくれた、セーフ」

「ところでさ、大二コース」

「なになに」

「ちょっとシヨックなんだけど、な、教授」

「僕、引っ越しすことになつた」

「えつ、うそ」

「父親の転勤が決まつた」

「どこに？」

「アメリカ」

「なんかちょっとぴりかっこいいね」

「ま、これも人生経験の一つだし」

「相変わらず冷静ね、すぐに行っちゃうの」

「いや、卒業後の4月」

「そつか、さびしいけどちょっと安心、すぐにいなくなっちゃうの

かと思つたわ、キャンプは行けるんでしょう

「もちろん」

「ウルシは聖学田指すの」

「おう、なんたつて野球の名門だからな、プロを目指すにはしっかりしたチームでないと、まつ、オレの偏差値でも何とか入れそうだし野球のセレクションに通れば合格ラインを少し下げるるんだ」「燃えてるね、野球少年、ところで聞いて。しえちゃんオールAとつたの！」

「へーすじこじさん、これでミュージカル教室だっけ」

「おめでとう志水さん」

「ありがとう、教授」

「口クちゃんは元気ないね」

「いつものことだよ、何しろ今日は口クの最もブルーな日だからな」

「ああ、志水さんすこいよな、ぼくの通知表なんかDのオンパレードだから、先生はよほどの事がないとEはつけないって話だから、実質オールEみたいなもんさ、勉強できるみんながうらやましいよ」「口クちゃん、大丈夫、あたしも勉強苦手だし、仲間・仲間」

「ユカの言葉あまりフォローになつてない気がするんだけど」

6年生にもなると変に男女が意識して、お互いに反発したり、妙によそよそしくなつたりする。現に同じクラスの中には今までに感じたことのない変な雰囲気を感じることもあつたし、誰かが誰かに告白メールを送つたなんてうわさも流れたりした。けれど5人組は何とも自然体、ユカは思う。（このまま、ずっとこの仲間で過ごしていきたい、こんなに落ち着ける居場所はないから）

「ところで、キャンプだけビ」

「最終日のナイトパーティーの出し物は1グループ6分、優勝賞品はメンバー全員の写真の入った記念パネルに自分たちでデザインできるオリジナル携帯ストラップ」

「園田君、やつと元気になつたみたいね」「へへっ」

「去年は入賞できなかつたからな」

「毎年、優勝は6年生のグループから出てるから、今年はなんとし
ても優勝だ」

「教授、去年の優勝つてどんな出し物だつけ」

「モンスターに仮装してダンスを踊つた、あれは見事でした。音楽
が鳴つて登場した瞬間に大歓声が上がつたのを覚えてる」

「みんな考えてきた?じゃ、ウルシから」

「あ、悪い、まだ考へ中」

「しーちゃんは」

「一応持つてきただけど・・・」

「教授は」

「『めん、まだです』

「ぼくも・・・」

「えーっ、口クちゃんも、ダメだなあ男子」

「まあ、いいじゃない、コカ。わたしも考へてきたけど何となくだ
し、私たちにとって最後のナイトパーティーだからみんなで1から
話していきましょうよ」

「おお、それがいいよ、さすがは志水さん

「ぼくも賛成だな」

「口クちゃんも調子いいんだから」

「じゃあ、みんなでアイデア出しましょ」

「しーちゃんがそう言つなら、そつじますか」

「さんせーい」

最後のナイトパーティーという言葉がコカの心にチクリと刺さる。
卒業したらウルシは野球の名門校へ、教授はアメリカ、しーちゃん
もノードリジカル学院に通える東京の寮制の学校を受けるらしい。口
クちゃんは地元の学校へ、そしてあたしはどうなつてるんだね?。

みんなが離れ離れになる光景が頭をよぎる。一〇の仲間で一緒に過ごせるのも限られた時間しかないんだ・・・

放課後の静かな廊下にけだるい風が少し足早に通り抜けた。

3 落雷

「じゃ今のところは何か音楽をやるつてことでいいか、ど「教授」異議なし、ずいぶん時間がかかったね」「いいじゃないの、キャンプまで時間はあるし、じっくりみんなでいいものを作つてこきましょうよ」「志水さんがいななりぼくも賛成」「口クちゃん、自主性、自主性」「ところで今何時になつた?」「4時過ぎよ、先生には5時までは教室を使つていいつて許可をもらつてるから」「なんだか外が暗いよ」「ほんと、真っ暗、夕立かも」「降り出す前に帰らなくちゃまずいな」

3階の教室の窓の外は暗雲が立ち込め、まるで夜のような暗い、遠雷がかすかに耳を掠める。

「早く帰ろう、あたしの苦手なもの中で雷はかなり上位」「そういうえば2年生の時のキャンプでコカが雷で泣き出しちゃキャンブリーダーにずっとつかまつてたよな」「不名誉な思い出」「だれだつて怖いものはあるわよ」「志水さんは?」「私はガンダム」「何、それ?」「ゴ・キ・ブ・リ、口にするのも怖いからそう呼ぶの。我が家では

通じるわ」

「それ、最高。ガンダムが出たーって叫ぶんだ」

「あ、ガンダム！」

「キヤツ！」

「冗談だよ」

「漆山くんの意地悪！」

不気味な外の景色をよそに教室の中に華やかな笑い声が響く。

「おつと、どうやら間に合わなかつたみたいだね」

バラバラという激しい音が教室中に響く。降り出した雨はドラムをたたくがごとく音を立てて窓に吹き付けた。間をおかず一瞬空を白く稲光が染める。遠くに見える港の船が影絵を見るみたいにシルエットになつて浮かび上がつた。続けて地鳴りのような雷鳴。

「さやーっ、神様助けて！」

「ユカちゃん、ぼくは神様じゃないから離して。Tシャツ伸び切っちゃうよ」

「めん口クちゃん」

「稻妻が走るのはつきり見えたぜ」

「あつ、また光った、来るぞ」

「もういいやー」

バリバリッ！　およそ雷とは思えぬ音と胃袋に響くような衝撃が5人を飲み込む。瞬間今まで見えていた互いの顔があつといつ間に見えなくなつた。

「て、停電だ」

「ほんとに助けてー」

「すぐに回復するよ、学校には自家発電装置があるからね
「教授はこんな時でも冷静だな」

「ま、真夜中つてわけじやないし、ほら、みんなの顔も目が慣れて
見えてきた」

知らず知らずのうちに小さな輪になり身を寄せ合っているのに気づく。気がつくとみんなの顔が目の前にある。ちょっとびり驚くとともに、なぜかユカは嬉しい気持にもなった。

「あつ電気が灯いた」

「みんな、大丈夫？」

「だ、だいじょうぶ・・・だと思つ」

「ユカ以外は大丈夫みたいだな、けつこうでかくてビビったけど、よく考えたら学校にいる限り安全だよな」

「さつきのは、もしかしたら学校の避雷針に落ちたのかもしぬれない、これ以上大きいのはないよ」

激しい雨は相変わらずだが、雷鳴は心なしか小さくなりスプリンターのように学校の上のトラックを駆け抜けたように思えた。

「雨が止むまではもう少しかかりそうだからこのまま、教室雨宿りといきましょ」

「そうね」

「えつ？」

「今のユカの声？」

「あたしじゃないよ」

「えつ、だつて女子2人しかいないよね」

「もう1人いるわ」

「えつ」

「えつ」

「ほら、あなたたちの後ろ」

声は教室の後ろで身を寄せていた5人の背中越しに聞こえてくる。教室の前を見ると教卓の上に誰かが腰をかけているのが見える。

「おまえ、だれ?」

「うちの学校の生徒じゃないわ」

「な、なんでそこにいるの」

5人は狐につままれたように顔を見合せると再び教卓を見つめ返した。そこには見たことのない少女が一人、いたずらっぽい笑顔でこちらを見ている。年のころは同年代か中学生くらい、青いワンピースのような光沢のある洋服に、少し先のとがったエナメルながこれまでピカピカ光る白い靴が蛍光灯の光を反射してまぶしい。足をぶらぶらとゆっくり揺らしながらもう一度5人に笑顔を振りまいた。

「あなた、本当にだれ?」

「ま、だれでもいいじゃない、雷はもう来ないわ、安心して

「中学生?」

「まつそんなどこかしらね、とにかく、はじめまして」

「ひちりこそ、で、なんでここにいるの、いつ入ってきたの」

「さっきの停電の時におじやましたわ。気がつかないのは無理ないけど。ね、あなたたちよかつたら少しだけ私とお話をしない、悪い話じやないから」

「お話?」

「そう、話を聞くぐらいいいでしょ」

「まあ、聞くだけなら……」

5人は再び顔を見合せお互いの怪訝そうな顔を確かめ合つ。な

ぜか断りきれない不思議な気持ちに全員がとまどっていた。

少女

4 少女

「あなたたちの夢は何」

「夢？」

「そう将来の夢よ、志水さんは」

「えつどりして名前を？」

「私はなんでもわかるのよ」

「私はミコージカルスターになる」と

「漆山君は」

「オレはプロ野球の選手になる」

「町田君はアメリカに行くんだつけ」

「宇宙工学の専門家が目標です、英語を勉強するにはいいチャンスだと思つてます」

「さすがね」

「篠原さんは」

「力はとまどつた。（みんなすうじこ、今からはつせりとした夢を持つて、それに向かつて頑張つてゐるんだ、それに比べてあたしは…。）

「あたしはまだ・・何をしたいのか見つかっていないの、みんなを尊敬しちゃう」

「心配しないで、小学生なんてそんなものよ。今から明確な夢を持つているの方が多いんじゃない」

「・・・」

「あなたもそのうちこまきつと見つかるわ、どんな未来かはお楽しみ

「最後は園田君」

「ぼ、ぼくは・・・」

「何？」

「ちょっと恥ずかしくて言えないよ」

「恥ずかしい」となんかないわ、夢なんだから
でも、話したらみんなに笑われるかも・・・」

「口ク、大丈夫だよ、誰も笑つたりしないって」

「そうよ、園田くん」

「うん、建築家になりたいんだ、ほらほくの家は小さくておんぼろ
だろ、だからうんとカツコイイ家を設計して家族に家を建ててあげ
るんだ」

「口クちゃん、素敵、ひとつてもいい夢だよ」

「でも、ぼく算数も技術家庭もひだし・・・」

「あたしもひだから」

「だからあんましふオローになつてないって」

5人は初めてお互いの夢をはつきりと知った。知らず知らずのうち
にみんな大人になつてるんだ。ユカは少ししょっぱいような気持
ちになる。夏休みに通う塾の講習が何となく頭に浮かぶ、あたしも
頑張らなくちゃいけないんだ。

「みんな立派じゃない、感心したわ、ねえ、あなたたちの夢を叶えて
あげましょうか」

「えつ夢を叶えるだつて」

「そうよ、悪い話じゃないでしょ」

「そんなことできるの?」

「そうだよ、オレたちをからかつてるんだ」「信じるか信じないかはあなたたち次第ね」

「そう簡単には信じられないです」

「それはそうね、でも夢は叶えてみたいでしょ?志水さん、あなた
はミュージカルスターになりたいんでしょ、でも必ずしもなれると

は限らない、きっと夢を実現する人のせいぜい一割程度じゃない、実現できる人って」

「・・・」

「漆山君、聖学に行つたからって将来プロになれる保証はないわ、きっとあなたより野球の上手な人はたくさんいるでしょうし、どんなに努力しても怪我や故障をしてプロにまでたどり着けない人が山のようにいる。科学者だってそう、10年以上大学で勉強して何本も論文書いて、それでも教授になれない人は

いっぱいいるのよ」

「テンション下がるよなあ、なんか、オレたちに恨みでもあるんじやない」

「まどこは小さなぐちとなつて少女に向かつた。夢は必ずしも叶うものばかりじゃない。

ユカは初めてそのことを感じた。今まで夢といつのは心に持ち続けて努力を重ねていけば何か必ず叶うものだと心の奥で思つていた。自分もやりたいことさえ見つかれば夢が実現すると何となく信じていた。でも、そうじゃないんだ、世の中には叶わない夢もいつぱいあるんだ。

「あなたのいうことはわかつたわ、でも、どうやって私たちの夢を叶えてくれるっていうの?」

しーちゃんが珍しく怒ったように詰め寄る。

「あたしの言う通りにすればいいだけ」「何をすればいいのかな」

「ちょっと待て、ちょっと待て、だまされるな、こいつは新手のサギだ、きっとこのあと小遣いを持つてこいとか、何かチケットを売りさばけとか、そんな話になるに決まってる。ばあちゃんが言って

たぞ、上手い話に気をつけろって

「くくつ、すごい想像力ね、あなたならサギに引つからないわ」

「やつぱり信じられない」

「信じられない」

「そんなの信じられないよ」

ユカ、教授、口クの言葉が思わずかぶる。

「そうね、いきなり信じろとこいつ方が無理かもね、じゃこいつしまじょう、一つ予言をしてあげる、それが当たつたらあたしの話を信じてくれる?」

「予言だつて?」

「おもしろい、予言してみるよ、最も大したことはできないだろうけど」

「明日の午後1時過ぎこの町でけつと大きな地震が起きる。わ港では積荷が崩れでけが人も出る、でも命には別条ないから安心して。どう、さすがに地震ではしほはつけないでしょ」

「うつそー」

「だから言つたでしょ、信じる信じないはあなたたち次第ですつて」

「・・・」

「もし、信じてくれたなら、こうしまじょう、3日後の夕方の5時この教室に来て。そこでお話しまじょう」

「どうする?」

「地震なんて予言できるわけないと想つねど」

「うん」

「わかった、きっと来るよ」

「信じてくれてありがと」

「3日後の午後5時でいいんだな」

「ええ、午後5時きつかりにしまじょう。ただし、チャンスは1回きりよ、その日に来なければこの話はおしまい。心配するでしょう

から家族には言わないほうがいいかもね、もちろん危険なことは何にもないから」

全員が顔を見合せた次の瞬間、少女の姿はどこにもなかつた。

「き、消えた・・・」

5 予言

「というわけなの、マスターどひゆひ」

「これはまた不思議な話だね」

「でしょ」

「お母さんには？」

「話してない」

「今の時点ではそのほうが賢明かな」

「話したって信じてくれるわけないしね、危ないから行っちゃいけないって止められるのが目に見えてるし」

「夢か・・で、ユカちゃんはどうするの」

「あたしまだ将来何がやりたいのか自分でもわからないの、だからピンとこない」

「なるほどね、でも一つだけアドバイスするなら、夢つて人に叶えてもらうのもじゃないんじゃないかな、僕もこの店出すまでにいろんなことがあって50年かかったわけで、でも、それだけにものすごく愛着もあってね、こうしてユカちゃんがお密さんとして来てくれるのが本当に嬉しいんだよ」

「そうだよね、よく考えてみたら昨日の事はそれこそ真夏の夢か幻かつて気がしてきた」

「落ち着いた？では特製のレモンスカッシュを！」
もちろんユカちゃんの買つてくれたリムーのレモンでね

「わっ、ありがとう」

マスターが棚からグラスを取ろうとした瞬間、店のドアの鈴が少し乱暴にカラーンカラーンと音をたてた。

「こりつしゃいませ」

「えつ、マスター ちがう、地震！」

店全体が小刻みに揺れ、やがてその揺れは大きな波に変わった。棚のグラスが一度に床に落ち甲高い音を立ててガラスのしぶきが跳ぶ。カウンターの水槽は波を打ち、中のグッピーとネオンテトラがあわてた様子で水中を泳ぎ回る。

「キヤーッ、大きい！」

カウンターを飛び出したマスターがそばにあつたバスタオルでユ力の頭をくるみ、テーブルの下に抱え込む。30秒にも満たない時間がユカにはとてもなく長い時間に感じられた。やがて沈黙がよみがえる。

「ユカちゃん、大丈夫かい」

「マスター！ 地震よ、あの子の言つた通りになつた！ あの子の予言が当たつたの！」

「・・・」

「港で積荷が崩れるの、ケガ人がてるわ

「・・・」

窓の外から不気味な鳴き声のように消防車のサイレン音が飛び込む、救急車の鳴き声も交えて港の方からはスピーカーの声、ホイップルの音、ただならぬ喧騒が風に乗つて舞い上がつてくる。

「あの子は言つたの、今日地震が起きて、港の事故もきっとあの子の予言通り起こつてるんだわ」

「どうやらその女の子の話は本当のようだね」

「マスター、ごめん、あたしみんなに会わなくちゃ、みんなに会つてくる！」

「わかった。何かあつたらいつでもおいで、これは店の携帯電話、ボタン一つでここにつながるから、しばらく持つていいよ。それから気が動転した時にはこいつをかじるといい、冷静になれる魔法の薬」

「あつ、エメラルドレモン」

「ありがとマスター、じゃ行つてくる」

ユカは走る、きっとみんなも来ているはずだ。ユカには妙な確信めいたものがあつた。

坂を駆け下り、リムーのある分かれ道を港と反対側に折れる。雑木林を過ぎたところに長く続く石段、駆け上ったところに鳥居が見える。クジラ神社と呼んでいる町の鎮守の境内が5人のいつもの集合場所だった。

(こむー…やつぱり誰か来てるー)

「ユカ！待つてたよ」

「しーちゃん、やつぱり来たんだね」

「ええ、1人じゃいられなくて」

「あたしも」

「おー、来たか」

「ウルシ！」

「みんな来ると思つたぜ、教授とロクはオレが電話で呼び出したからもうすぐだ」

ずっと昔はクジラの水揚げ港だったこの町の港を守る神社にはクジラを象つた石像が2体。これがクジラ神社と呼ばれる所以である。正式には水島神社という。港を一望できる山の中腹にある境内からも港のあわただしさがはつきりと見える。消防車の赤と救急車の白

が夏の光にはっきりと浮かび上がる。倒れた積荷を持ち上げるため
かクレーン車のような黄色い車両も見える。

「あつ、2人来たみたい、教授、ロクちゃん、ユウちゃん、」

「予言当たったね」

「あの子の言った通りになつたわ」

「じゃ、やっぱり昨日の話は本当つてことか」

「信じられないけど、信じるしかないよ」

「で、どうするの、3日後つて言ってたからあせつてだよ」

「行くだけ行つてみるつてのはどうだ、ほら危険なことはないつて
言つてたろ」

「何しに行くの」

「夢を叶えてくれるつて話だろ、悪い話じやないじゃん、もしかし
たらオレを野球の天才にしてくれるのかも」

「未来を予言したわけだから、超能力者なのかもしれないね」

「どうなの、教授」

「非科学的なことには違いないけど、世界には科学で説明できない
力を持つ人が確かに存在する」

「チャンスは1回だけだつて言つてたぜ、オレは行く、みんなはどうだ」

「・・・」

「私も話だけは聞いてみる、ダンスが上達する秘訣を教えてもらえ
るならラッキーかな」

「僕も超能力と科学のヒントがもらえそうだし」

「頭良くしてくれるかなあ」

「ユカは?」

「えつ、あたしは・・・」

ユカはためらう。いいじゃない、話を聞くだけなら、何をためら

う。自分にはっきりとした夢がないこと、そして「夢は人に叶えてもらひるものじゃない」マスターの言葉もユカの心を揺らしていた。しばらく考えてからユカはよつやくのどの奥から言葉を押し出した。

「う、うん、行くだけ行ってみようかな・・・」

「よし、決まった、あさつての夕方5時、家族が心配しないようマークキャンプの打ち合わせ、帰宅は7時と全員そろって伝える」と「10分前には行ってるわ

「じゃあ、校門の前で」

口ク

6 口ク

「なんだかおかしなことになつたね」

「うん、ユ力ちゃんはまだ将来の夢が見つからないんだっけ」

「そうなの、だから口クちゃんはずごこよ、建築家になる夢、かつ
こいいよ」

「う、うん」

「あたし、口クちゃんの建てた家に住んでみたいよ」

「ありがと」

ユ力の家と口クの家は近い。がらくた館をはさんで300メートルほどの距離になる。ユ力の家は道を一つ隔ててがらくた館の隣。小さな庭がいつもきれいに手入れされているのはおじいちゃんの仕事。築50年を超える昔ながらの平屋の家は「古い」というよりは大切に住んできた「趣」を感じさせる。

口クの家はがらくた館を出て西へ3～4分ほど。石段を降りたところに6戸並んでいる市営住宅の一戸だ。

「元気ないね、悩みもあるんでしょ」

「どうしてみんな勉強できるのかな、志水さんオールAだったんでしょ」

「あつ、それか」

「ぼくもまじめに頑張ってるんだ、授業もちゃんと聞いてるし、毎朝漢字と計算の練習だつてしてるし、でも5年生から始まった小テスト、あのテストになると全然だめなんだ、一生懸命覚えたことほとんど忘れちゃうんだ」

「うちの学校、テストの点で評価するからしづこよ、塾でほか

の学校の人間に聞いたら毎週小テストなんてしないんだって、評価もうちの学校みたいにAからEなんて細かくつけられたりしなくつて『よい』とか『ふつづ』とかアバウトらしいし、校長先生を恨んじやう

「中学に行っても、高校に行ってもこんな感じなのかな」

「もつと厳しいかもね」

「そうかあ・・・」

「大人になつて会社に入つても成績つけられるらしいよ、チチが『ジンジサテイ』がどうのこうのつてハハに話してたの聞いたことある

「勉強できないと夢つて叶わないよね」

「うーん、そりや必要だとは思うけど、人間の価値つて勉強だけじゃないんじやない、口クちゃん優しいし、あたし勉強できても冷たい人はいやだもん」

「そうだよね、ちょっと安心した」

「元気だしなよ、しーちゃんはしーちゃん、口クちゃんは口クちゃん、2人ともとっても素敵だよ」

「ありがと」

「じゃ、あさつて」

「うん、また」

小学校6年生、それぞれが大きな夢や希望に胸をふくらませる反面、それぞれがみんな小さな悩みも抱えている。何かの本に書いてあつた。「悩みはチョウになつて羽ばたくまでにサナギの中でたくわえる養分だ」つて。でもそれはチョウになつて初めて気づくことなのだ。

「ただいま、ハハ」

「お帰りなさい、ユカ、地震すごかつたでしょ」

「港で事故があつたみたいなの、クジラ神社から見てきた」

「あら、そう、怪我した人がいなければいいわね」

「今日はチチ遅いの?」

「そうね、忙しいみたいだからユカが寝た後かな?」

「明日の5時にみんなと学校でサマーキャンプの打ち合わせするから、7時にはちゃんと帰つてくるからハハからチチに言つておいてくれる」

「わかったわ、日が長いとはいってもそれ以上は遅くなっちゃダメよ」

「わかつた」

「庭のお花に水あげてくれる」

「うん」

「ただいま・・」

「おかえりなさい、ロクちゃん」

「港はどうだつた」

「神社からしか見てないけど消防車とかクレーン車とかいっぱい来てたみたいだつた、サイレンの音も」

「そう、怖いわね、ようやく戻づけたのよ、おやつにする?」

「つうん、ちょっと疲れちゃつたから昼寝していい?」

「珍しいわね、おやつもいらないなんて、あんな大きな地震、生ま
れてから初めてですものね、驚いたでしょ」

「お母さんも初めて?」

「この町ではね、でも小さい頃住んでいた神戸でものすごく大きな地震にあつたことがあるの、もう終わりかと思つたわ」

「へーえ」

「あつ、昼寝の前にちょっと相談、お父さんと話したんだけど夏休みだけでも塾に行つてみたらつて、ほら、商店街の郵便局の横に新しくできたでしょ、進学塾じゃなくて学校でわからないところを教えてくれる補習塾なんですつて。チラシを見たけどていねいに教えてくれそうよ」

「・・・考え方とく」

IJの2日間の出来事が何とはなしに口クの心に重くのしかかる。口カの言葉になぐさめられはしても、重い気持ちのすべてを振り払うことはできない。「劣等感」という言葉を口クはまだ知らないが、みんなができることが自分にはできない、その気持ちだけはだれよりも口ク自身が強く感じていた。「勉強」という魔物が頭を締め付けているようだ。心の疲れは口クに睡魔となつて忍び寄つた。

(ぼくは、将来建築家になるのが夢です)

(何言つてんだよ、算数も技術も口でなれるわけないだろ)

(でも、頑張つて勉強すればなれるんだ)

(ムリ、ムリ、人には努力で補いきれない才能つてものがあるんだ、お前にはその才能がないのや、誰が見てもわかるよ)

(そんなことないよ！)

^あ、園田くん、きみの今回の設計ひどかっただね、お姫さんからクレームが来たよ、書き直してもらおうかとも思つたけど他の者に頼むことにしたから、暮れの「ジンジサテイ」は覚悟してもらわんとな

^申し訳ありません、社長、ぼくにやり直させて下さい、今度はいいものを書きますから、お願ひしますー^

^いや、もうこりよ、君、才能ないみたいだから他の仕事を探したほうがいいんじゃない

^社長、お願ひします・・・^

心の病はしばしば悪夢を誘い出す。誘い出された悪夢は容赦なく口クの心をむしばむ。振り切るつとしても振り切ることのできないねちっこい悪魔は「夢」というキラキラ輝く宝石を一つずつ黒っぽい石口へと変えていった。

(夢・・か)

(いやな汗・・)

(夢がなうなんて・・・そんなことあるはずかなこと)

「夢を吐えてあげる」という少女の言葉を口くせ頭の中で思い出しては繰り返した。

7 真相

まだ明るさの十分に残った夏の夕方は、それでも真っ白だった入道雲が微かに赤い色に彩られ、蝉の声の中にはヒグラシの声が紛れ始めていた。窓の外をながめていた教授が最初に声をかけた。

「5時10分前、みんなそろったようだね」

「OK！」

「ええ、ちょっと興奮して30分も早く来ちゃったわ」

「ちゃんとサマーキャンプの話つて言つてきたよな」

「もちろん、でも7時までは絶対に帰つてこいつて」

「私もよ、学校の警備員さんには申請書出しておいたから

「えつそんなの要るんだ」

「そりゃそうよ、日直の先生だって5時で帰るんだから、黙つて使つたら通報ものよ」

「さすがはしーちゃん」

「でも、地震には驚いたね」

「ああ、オレもベッドに寝てグローブ磨いてたんだけど思わず飛び

起きたよ」

「港の事故も本当だつた？」

「うん、新聞持ってきたの、ほら、見て地方版に事故の事が出てる

「震度5 水島港で荷崩れ 作業員2人軽傷」

「本當だ、あいつの言つた通りだ」

「出まかせが偶然当たつたんじゃないとすれば本物の超能力者ってことかしら」

「超能力なんてあるの、教授」

「科学的はない。でもそれは僕らのものさしで測つてているからで、宇宙の中には僕らの知らないものさしがあるかもしないってこと「どうこうこと?」

「そうだね、例えば宇宙人、人類はまだ出会つたことがないから信じていない人が多いけど、宇宙に無限の星がある限り、その中で地球上にしか生命が誕生しないって考える方が、確率的にものすごく低いんだ。地球外生命は限りなく無限に近い確率で存在する」

「でも誰も本物に出会つたことないぜ」

「遠すぎて出会えないだけれど、100キロ続く砂漠にテントウ虫とアリが1匹ずついると思えばいい」

「まず出会うことはないな」

「それは僕らがアリの世界のものさしで見てるからだ

「どういうこと?」

「テントウ虫は空を飛べるんだ」

「あつ、そつか!アリにとつては限りなく不可能に近い確率でも、テントウ虫ならアリの何十倍も確率が高くなるわ、空から探し下さいなもの」

「教授、すげーい、あたし尊敬しちゃう」

「要するに超能力もぼくらが知らないだけであるかもしないってことだね」

「その通り、口ク、お見事」

「ところでもう5時よ」

「あ、ほんとだ、あの子現れないね」

「やっぱりからかわれたんじゃないかな?」

5人は教室の後ろの椅子に腰をかけてあの田のようにお互いに顔を見合させた。

「私ならさつきからいるわよ

「えつ」

「あつ」

声の方を振り向くと、教卓の上にはあの時の同じように少女が腰をかけ笑顔で語りかける。

「どうから入つてきたの」

「ドアを開ける音なんか聞こえなかつたぞ」

「ま、どこからでもいいじゃない、あなたたちの話聞いてたわ、なかなかおもしろかつた」

「きみは、超能力者なの」

「残念ね」

「だつて、地震を予言して当てたじやない」

「でも超能力なんて使えないわ」

「じゃ、どうして地震が起きるのがわかるんだ?」

「さあ、どうしてかしらね?」

「そうか、未来人てことか、君は未来を予言したんじやない、過去の事を僕らに知らせただけなんだ、そつだらつ?」

「まあ、そんなとこかしらね」

「じゃ、あたしたちの未来が分かるんだ」

「私が言つたのはあなたたちの夢を叶えてあげるつてこと」

「オレ、将来はプロ野球の選手になりたいんだ、力を貸してくれよ、その、未来の技術の詰まったトレーニングマシーンとか、そんなのがきつとあるんだろ?」

少女は相変わらず微かな笑みをたたえながら手を差し出した、そこには・・・

「ネックレス?」

「そう、これはあなたたちを未来へ連れていく道具、自分の手で身

に着けたその瞬間未来へ跳ぶわ。そしてその未来はあなたたちの夢見た未来、今、心に描いている夢が必ず実現しているの」「つそだろ?」

「信じられない・・・」

「信じる信じないは自由、でも地震は起きたわよね」

「未来へ行つたら今の自分は消えちゃうの」

「そうね」

「家族が心配して大騒ぎになるわ」

「ネックレスに触つた人以外は、この世界では記憶から消えちゃうから、家族や友達を悲しませることはないわ、それに未来に行けば未来のあなたを今ままの家族が受け入れてくれている、何も淋しいことはないの」

「どう、漆山君、プロ野球の名選手として華やかな人生を送つてみるのは、志水さん、あなたはミューージカルスターとして舞台の上で輝いてるの、素敵な話でしょ」

「でも、あなたはどうして私たちにそんな話をしてくれるので」

「今は言えないわ、話せる日が来るといいけど」

あまりの突飛な話に5人はとまどい、映画かおとぎ話のようなシンボルが目の前で展開されている、でもこれは現実なのだ。

「未来へ行つたらもう帰れないの?」

「そうね。でも1回だけ帰るチャンスをあげる。あなたたちだって心配でしょ、未来へ行つてからだまされた、帰れないじゃ」

再び5人は顔を見合つた、自分から言葉を発するのが怖くて誰かが口を開くのをそれぞれが待っていた。

「そんな大切なことすぐには決められない」

「もつともね、じゃ考える時間あげる、1時間後に答えを聞かせ

てね、一度きりのチャンスだから自分で決めるのよ
「あつまた消えた・・・」

8 選択

教室の中を静寂が支配する。

5人とも何かを口にしたくてもできない。驚きはもちろんあるう、しかし心の大半は戸惑いであり迷いである。自分は今2枚のカードを与えた、「残るか」「行くか」そしてそのカードの1枚は自分の人生を、自分の夢を、自分の手で叶えられる魔法のカードなのだ。そしてそれをわずか1時間という時間の中で決断しなければならない緊張とあせり、誰もが自分の心の中で葛藤していた。重い口を開いたのはユカ。

「みんな、どうするの」
「どうするつて、どうする？」
「ウルシー真剣に！」
「めちゃくちゃ真剣だよ、オレ」
「冷静に考えましょう、未来へ行つたらどうなるの」
「自分の夢が実現している」
「私たち5人はそれぞれどうなつてるの、別れ別れになつて友達でいられないの？それじゃいやだわ」
「いや、ネットクレスに触つた人以外の記憶から消えるつて言つてた、つまり全員が触れば僕らの記憶は消えないはずだ」
「しーちゃんと教授の問答すごく明快・・お願い続けて。あたしも頭整理する」
「家族は？」
「現代では記憶から消える・・でも未来では未来の自分を受け入れてくれる」
「私たちの今の記憶は残るの？未来で成功していくても今までの思い

出が全てなくなるのはいや

「それは・・言つてなかつた」

「どうするの」

「こんなこと1時間で決めるのなんて無理だよね

「時間を延ばしましょう」

「えつ、時間を延ばすつて、しーちゃんも実は未来人なの

「ユカ、真剣？それともボケてるのか？」

「真剣に決まつてるじゃない」

「あの子はこう言つたわ、自分の手で身につけた瞬間に未来へ跳ぶつて、それからネックレスに触れた人はお互いの記憶が残るつて

「たしかにそう言つてたね」

「ちよつとどするいけど、ひとまず全員が未来へ行くと答える、全員がネックレスに触るわ、その時点で私たちはお互いの記憶をキープできる。つけるかつつけないかはそれからじつくり考えればいいじゃない」

「すうーい、しーちゃん」

「でも、そんなこときつとお見通しじゃないかな、ぼくたちのこの会話だつて全部聞かれてるに決まつてるよ」

「いいじやない、もともとが狐に化かされたような話だわ、未来へ行くチャンスがなくなつたからつて現状に戻るだけじゃない」

考える時間が手に入る、今までのどうしたらいいかわからない混乱の中で、その可能性が示されただけで全員の心に安堵が宿つた。

(さすがはしーちゃんだ。あたしだけならついたえてきつと何も行動を起こさないまま終わつてた)

「じゃ、もうこいつでいい？」

「了解」

時計の針がタイムリミットを示す。

全員が一斉に腕時計に目を落とした瞬間・・・

少女は三たび、同じように姿を現した。5人は今度こそ現れる瞬間を見ようと構えていたが一瞬の出来事にそれは叶わなかつた。

「どう、答えは出たかしら」

「私たち未来へ行きます」

「そう、わかつたわ、それじゃ一人ずつネックレスを渡すわね」

しーちゃん、ウルシ、教授、口ク、そしてコカ、一人ずつその手にネックレスが手渡される。銀色のチーンに1ミリ程度であろうか、ガーネットのような真っ赤な宝石をあしらつたペンダントがついている、見た目はなんてことのないネックレスだ、重さはほとんど感じない。

「確かに渡したわ、上手い作戦だつたわね」

「やつぱりわかつてたの?」

「もちろんよ」

「じゃ、何で?」

「これであなたたちの記憶は消えない、でも実はここからが本当の決断よ」

「えつ」

「あなたたちは一度ネックレスを手にしてしまつた、使うか使わないかはあなたたちの自由、でもどう、誰かが使って誰かが使わなかつたら」

「あつ」

「そう、どちらにしても友達を失うことになる。記憶は消えないからね。仲良し5人組がばらばらになるかもしれないのよ」

「そうか、しまつた!そこまでは考えなかつた!お前性格悪すぎ」

「チャンスの裏側には必ずリスクが存在するわ、覚えておくといい

「わね」

「そんなこと……」

「私はこれで消えようと思うんだけど何か聞きたいことはある?」

「ありすぎて何から聞いたらしいのか・・・」

「大事なことだけ伝えておくわね」

「大事な・・・こと」

「ネックレスは今から24時間だけ力を持つ。それを過ぎればただのオモチャ。その瞬間に私の事もすべて忘れるから」

「24時間・・・」

「それから、ここにいる5人以外の誰かに1人でもこのことを話したら、その瞬間に全員のネックレスは効力を失うわ」

「あなたたちはこれから24時間きっと苦しみ迷い続けるわ、人生はとても重いの、自分の人生と向き合って、自分の意思で選ばなければいけないの」

「・・・・・」

「そうそう、1つ大切なことを忘れてたわ、はいこれ」

「何?」

「指輪?」

「ネックレスを使って未来に行つた後、帰りたくないたらその指輪をはめるといいわ、一度だけ帰つてこられるつて約束したものね。もつとも帰るつてことはたつた一度のチャンスをつかんだ未来での成功を捨ててくることになるけど」

「ねつもつと聞きたいことがある、いっぱい」

「残念ながらここまで、ほら7時までに帰らないと家族が心配するわ、さよなら」

「待つて!・・・・・」

再び沈黙が教室を包んだ、全員があまりにも重い宿題を抱えて家路につかねばならない。

「明日の正午、場所は神社・・・」

ウルシの声が静かに今日の終わりを告げた。

迷い

9 迷い

「行く」か「とどまる」か

「使う」か「使わない」か

5人は人生と「長い道の分岐点にいきなり連れてこられた。

山の頂へと続く険しい山道を登ることが人生ならば、一方の道を選べばそこには真新しいロープウェイが待っている。それは何の苦労もなく快適に頂上に連れてってくれる。そして、頂上は間違いなく澄み渡つた青空なのだ。そこから眼下の景色を眺めるのはさぞかし気持ちのいいことだろう。

もう一方の道は見るからにくねくねと折れ曲がり先が見えない。途中で雷に遭うこともあれば、足を滑らせて転び傷を負うこともあるかもしれない、行き先を見失い暗い森を淋しくさ迷うこともあるだろう。しかも、苦労してようやくたどり着いた山頂が晴れているとは限らないのだ。

だれだって、楽な道を選びたくなる、だれだって晴れた頂に立したい。

(みんなはどうするんだろう)

(あたしどちがつてみんな夢を持つてる、もしあたしだけが残ることになつたら・・あたしはひとりぼっち・・)

ユカは迷つ。自分もみんなと同じ道を選べば・・・

でも、何か違つ気がする。「夢は人から与えられるものじゃない」マスターの言葉がずっと心に引っかかっている。自分にはまだはつきりとした夢がないから、それはきれい事なの?いや、やつぱり違う、山を登る途中で汗をぬぐいながら飲む水筒の水のおいしさ、道端にふと見つけた花の美しさ、そして何よりも頂上にたどり着いた時の言葉では言い表せない喜び、まだ短い人生の中でユカにもそんな体験があった。たとえ天氣が悪くとも、そこで広げて口にしたおにぎりがどれだけ美味しかったか。

選べる道は1つ。

「全員そろつたな、いい場所を見つけた。神社の集会所のカギが壊れてる、あの中なら落ち着いて話せる」

木造の古い集会所は扉を閉めても蝉時雨が微かに忍び込む、曇りガラスでは防ぎきれない夏の日差しが部屋の中を白く照らしている。湿気がないせいか、思いのほか暑さを感じないのが救いだ。

「タベはほとんど眠れなかつたわ」

「志水さんも?僕も同じだ、こんな気持ちで過ごした夜は生まれてから始めてだ」

「オレもだよ、で、みんなどうするんだ」

「・・・」
「・・・」
「・・・」
「・・・」

「私、悩んだ、本当に苦しかつた。でも、決められない、みんなの気持ちを確かめないと・・・」

「オレも考えた、生まれてからこんなに考えたことないくらい考え

た

「で、結論は」

「みんな一緒に・・・行つてもいいかなって・・・」

「えつ」

「だつて、夢を手にできるんだろ、それに家族を悲しませることもないし、未来では今までと同じように家族だし、それに、ほらみんなどだつて一緒にいられる、ただ。単に大人になつてのだけかなつて」

「私も、みんなと一緒に・・・どうしてモリモージカルの舞台に立つてみたい」

「僕も悩んだ、でも一度は帰つてくるチャンスがあるんだ、ならば、自分の未来を見てみたい・・そんな気持ちも強くなつてる」

「教授・・・」

「そうだよ、オレたちは帰るチャンスを持つてるんだ、行つてみない手はないぜ」

「そうよね、私たち、今世界で誰にもできない体験ができるかもしれない」

「うん」

「なんだか方向が見えてきたみたいだね」

曇りガラスの向こうでは緑の木々が風に揺れているのがわかる、蝉時雨の音が静かな空間に5人の決意を後押しするかのようにひときわ大きく響き渡つた。

「ね、ちょっと待つて」

「何? ユカ」

「あたしは・・・残る」

「えつ?」

「あたしは行かない!」

「あたしもずっと考えた、一晩中考えたの、あたしはみんなと違つ

てはつきっとした夢がないからかもしれない、でもなんか違うと思

うの

「何がどう違うんだい？」

教授が戸惑いながらも、努めて冷静に尋ねる。

「夢って、誰かに『はい』って渡されて叶えるものなの？何の苦労もしないで手に入れるものなの？そんなの夢でも何でもないよ。もし、未来へ行ってウルシがプロ野球の有名選手だとしても、しーちゃんがミュージカルスターだとしても、教授がノーベル賞を獲るような学者だとしても、あたし、喜べない！今までとおんなじようにみんなと話せない！そんなのがびしいよ……。」

「ユカ・・・

「夢は・・夢は・・大変だけど叶えるまでが大切なんだよ、頑張るから叶つたときにきっと嬉しいんだと思う、できなかつた時には悔しいんだと思う、だから涙も出るんだよ、みんな！目を覚まそうよ！…」

ユカは涙を止められなかつた。自分は今もしかすると仲間たちの夢をつぶそうとしているのかもしない、自分のわがままのかもしない、でもあふれ出る言葉は自分の意思とは関係なしに次から次へと胸の中から湧き出してくる。

「あたしもちゃんと夢を見つける！みんなと同じように夢を見つけて頑張る！だからお願ひ、一緒に頑張ろうよ！…くじけやうになつたらあたしを助けて！」

「・・・」

「・・・

「やうだよな・・・確かに努力しないでいい思いしたつてつまんな
いよな」

「ウルシ・・」

ユカが涙をぬぐいながらウルシを見つめた。

「ユカ、『ごめん』ありがと、私目が覚めたわ、目の前のおいしい未
来に手を伸ばそつなんて、なんか恥ずかしいな」

「しーちゃん」

「僕も考えさせられました、篠宮さん、感謝します」

「教授・・」

「みんな、『ごめん』あたし、みんなの夢の邪魔をしようとしてるん
じゃないの・・・」

ユカは再び泣きじゅりながらくずれおちかける、しーちゃんが
しつかりとその体を受け止めてさわやいた。

「ユカ、大丈夫よ、だれもユカが私たちの夢を邪魔しようだなんて
思つてないから」

「もう泣くな、お前が正しい」

「篠宮さん、よく言つてくれました」

それぞれの胸に安堵が芽生えかけた時、その芽は突然冷たい水を
あびせられ凍りついた。

「ほ、ほくは、行くよ」

10 決断

「え？」

「口クちゃん・・・」

「口ク、今何て言つた？」

口クは落ち少し興奮したように顔を赤らめ、しかし確かな口調で言い放つた。

「ぼくは未来へ行く」

「口クちゃん、どうして？一人で行つたら離れ離れになっちゃうんだよ」

ユカが確認するよつと口クを問い合わせる。

「やうだよ、僕たち今、篠宮さんの言葉ではつきりわかつたんだ、自分たちで努力して夢を叶えよつて」

しばらくの沈黙の後、口クは今までに見たことがないよつな厳しい目で4人の顔を順番に見つめた。

「みんなはいいよ、志水さんだってウルシだって、教授だって、きっと努力すれば夢が叶う、でもぼくは違う、ぼくはだめさ、いくら頑張ってもみんなのようにはなれない」

しーちゃんは必死に説得を試みる。

「園田くん、そんなことない、園田くんだって頑張ればできるわ」

「ぼくだって頑張ってる、自分でできることは頑張ってるんだ、でも、結果はオールDで、才能のあるみんなにぼくの気持なんかわからぬいよー。」

「口ク、考え方、お前がいなくなるのなんて耐えられないよ、マークリヤンプはどうする、みんなで最後に優勝するんだろ」

「ぼくは決めたんだ、1人になつてもいい、今までずっと悔しい思いをしてた。だからうんと才能のある大人になつて、自分の思うように生れる、お母さんに立派な家を建ててあげるんだ」

「口ク！」

「口クちゃん！」

凍りついた空氣は嵐のように小さな小屋の中を吹き荒れていた。一度は溶けかけた固い氷が今や大きな塊となつて口クと4人の間に氷河のように横たわっている。もう誰も溶かすことはできない。

「口ク、もう1度だけ言いつ、一緒にいよう」

「ウルシだってついさっきまで行く気満々だつたじゃないか、説得

「そ、それは・・みんなで一緒にいくなりつて考えたんだ、1人なら行こつとは思わない」

「それじゃ、中途半端じゃないか、みんなで行くとか、行つてみて帰るとか、それもこれもウルシはどうちに転んでもいいつて考えてるからだよ、でもぼくはわかつたんだ、ぼくが夢を叶えるにはこのチャンスをものにするしかないつて、だから、ぼくは・・1人でも行く！」

「ロクちゃん、本当に叶つたやつのへ考へ直せないの」

「うそ、コカちゃん、今までいろいろと相談に乗ってくれてありが
とう」

「ロクちゃん……」

今のロクを止められないことを4人は悟った、同時に今まで時
には自分たちに愚痴をこぼしていたロクがここまで真剣に悩んでし
たことも。

ロクは小さな部屋をみんなから遠ざかるように1歩1歩後ずさる。
そして、最後の一歩である右足を壁にぶつけたと同時に、ポケット
からネックレスを取り出す。それからひとつ大きな深呼吸をした後
ゆっくりと血の手でそれを首につけた。

「みんな、やよひな！」

瞬間、部屋の中が暗闇に飲み込まれる、そして回る、回る、回る。
まるで宇宙空間を疾走するジェットコースターのように、それはお
そらく数秒間の出来事、でもコカたちはその何倍の時間にも感じ
られた。やがて、再び静寂が訪れる。

「・・・」

「ロクちゃん、行っちゃった・・・」

「私、知らなかつた、園田くんがあんなに悩んでたなんて、それな
のにオールA取つたとか言つて、どれだけ園田くんの気持ちを傷つ
けたか・・・」めんなさい

「泣かないで、志水さん、僕らなんでも本気で聞こねるから仲間
だつたんじやないか」

「そうだ、気にすることなこと」

「あっ、何あれ？」

部屋の少し高い天井から舞い降りてくるものがある、それはボタノ雪のようにゆっくりと畳の上に落ちた。

「見て、ロクの事が書いてある！」

「み、未来の新聞だ・・・」

^ 園田 祿氏 世界建築コンペ優勝 ^

「やつぱつあいつの話は本当だつたんだ」

「さびしいけど、ロクちゃんのためにはよかつたのかも・・・」

「ロクは、自分で自分の人生を選んだんだ」

「・・・」

「あら、もう一枚ある」

「えつ、大変」

^ 建築家 園田氏 狙撃され重体 ^

「何だつて！」

『世界的に有名な建築家、園田祿氏が講演先の海外で何者かに狙撃された。仕事上でライバル関係に当たる外国企業が関与か、園田氏は意識不明の重体で・・・』

「ロクー！」

「こんなことつてあるのかよ！」

「ロクちゃんが死んじゃう！」

「園田くん！」

「思わぬ展開になつたわね」

「あつお前、いつの間に」

「結局園田くんが一番勇気があつたつてことかしら」

「あなた、私たちをだましたのね、この記事は何、園田くんがこんなひどい目に遭うなんて一言も言わなかつたじゃない」

「だましてなんかないわ。私はあなたたちの夢を叶えてあげると言つただけ。園田くんは夢を叶えたわ、成功したのよ。でもそのあとどうなるかは自分次第、成功したあとのことまで私は話した?」

「サギだぜ、そんなの」

「チャンスの裏側にはリスクが存在する、これは教えたわね、もう一つ教えてあげましよう、計画通りに進む人生なんてないの、自分の人生は自分で責任を持つしかない。園田くんは自分で未来へ行く道を選んだ、選んだ以上その結果も自分で責任を負うしかないのよ

「そんな・・・」

「あなたたちもよく考えて道を選ぶのね、少なくとも今のあなたたちには選ぶ権利と自由があるんだから。それさえなかつた時代があつたこと、社会科で習つたでしょ」

「・・・」

「このあと、どうするのかしら、ま、私の出る幕じゃないけど・・・ わよみがり」

覚悟

11 覚悟

真夏の乾いた空気が蝉時雨の声とともにかすかに忍び込む。沈黙が再び部屋の中を支配する。誰もが言葉を失う中、ユカも戸惑い続けていた。

（あたしたち、もう後戻りができないところにきたのかもしれない。
・・）

教授が重い口を開く。

「とんでもないことになつたようだね」
「どうしたらいいのあたしたち」
「もう一度冷静に考えましょ」
しーちゃんが自分自身を落ち着かせるかのようにゆっくりとみなを見つめて言った。

「ああ、オレたちはサマーキャンプの計画を練つてた、そこへあいつが現れた」

「そして、夢を叶えてくれるといつた」 教授が確認する。

「どうしてオレたちはそんなこと信じたか
「地震を予言したからだわ」 ユカの眼が大きく見開く。

「おれたちはあいつを信じて未来の成功を手に入れようと考えた」
「でもユカが最後のところで止めてくれたわ」

「でも、口クは止められなかつた

教授の言葉に一瞬の沈黙が・・・

「オレたちははつきりわかつたんだ、くさいセリフだけど夢は自分の手で叶えるものなんだつて」

「何となく見えてきたね、僕たちにできることを僕たちの手で努力すればいい、いや、努力しなくちゃいけない」

「ただけど、それは今までと同じことじゃない」

「うん、でも篠宮さん、僕らがしなくちゃいけない努力ははつきりしてる」

「わかった！ 口クちゃんを連れ戻すこと！」

「そう、何が何でも口クを助けるんだ」

「うん！」

「で、オレたちどうすればいい？」

「答えは一つ、僕たちも未来へ跳ぶ

「えつ、それは・・・」

ユカが教授の顔を見て戸惑いの表情を見せる。

「篠宮さん、勘違いしないで、僕らが未来へ行くのは夢を手にするためじゃない、口クを救うためだ、だから・・必ず帰つてくる」

「そうだ、まだネックレスに触れてから24時間経つてない、今ならまだ間に合うぜ」

「そうだわ、そして帰つてくるチャンスも一度だけ残つてる

「・・・」

ユカはまだ不安を拭いきれない。

「でも、行つた先でどんなことが待つてゐるかわからんじよ、お互のことだつて覚えてるかどうか・・・」

「うん、でもぼくらにできることがほかにあるかい?」そのまま口クガいなまま毎日を過ごしていけるか

「そんなの絶対いや!」

「じゃ、覚悟するしかない、そしてお互いを信じるんだ、4人が信じあつて、1人1人ができる限りの努力をして口クを連れ戻す」「みんな、どう?」

教授が決断を迫つた。そして、この決断には大きな覚悟が必要だ。

「・・・」

「私、やるわ、園田くんが悩んでいたのに気付かなかつた私がいけなかつたの」

「さすが志水さんだ、おれも行くぜ、コカは」

「あたしも・・行く」

「よし、決まりだ」

「よし、みんな手を出せ」

4人は両手を出し合ひ、お互いの手のぬくもりを感じあつ、1人では持ちきれなかつた勇気が少しづつ4人の手を伝わりふくらんでいくのを感じた。

「ねえ、未来に行つてもあたしたちわかりあえるよね

ユカがすぐるような目で教授を見つめた。

「そ、それは行つてみないとわからない、記憶は残ると言つてたけどそれは現在の事だから

「全員、同じ場所に傷をつけましょ、きっと何年たつても忘れないわ

「こわつー!

「志水さんの気持ちはわかるけど女の子に傷をつけるなんてできないよ」

「あたしから提案」

「何、ユカ」

「気休めかもしないけど、おまじない、これ」

「レモン?」

「うん、リムーでもらったエメラルドレモン、気持ちが動搖した時に冷静になれる魔法の薬なんだって」

「1個しかないの?」

「うん、だから・・・」

「よし、順番にかじりな」

「いいね、じゃおれからだ」

4人は順番にゅっくつとレモンをかじる。

「すっぺー」

「次は私ね・・さやー刺激的」

「おお、これは・・・」

「最後はユカよ」

「ユカは全ての想いをこめてレモンをかじる、ちこせなししぶきが顔の前ではじけるのがはつきり見えた。

「うー、ひつやたまりません」

「ユカの顔おばあちゃん」

「失礼ね」

4人の笑い声が部屋の中に響く。

(何だか久しぶりに心から笑った気がする) ユカはうれしかった、心の底では本当は怖かったんだ、でもみんなとなら勇気を振り絞れ

る、そんな気がした。

「最後にもう一度確認しよっ」

「確認で、何を、教授？」

「これから先はどうなるか、わからない、みんな一緒に行動できるのか、それともバラバラになるのか」

「うん」

「たとえ、一人にならうとも目的はただ一つ」

「園田くんを救うこと」

「そうだ、もしかすると全員で帰れないかもしない、たとえ、そんな場面にoutuわしてもこの目的を忘れない、口クはこのままだと死んでしまうかもしないんだ、つらくても口クの命を助ける、それだけはみんなで心に誓おう」

「よし、わかった」

「うん」

「ええ、わかったわ」

「よし、準備はいい、みんなネックレスを出して」

「僕が3つ数える、3つ目でネックレスを付けるんだ、いいね」

「OK」

「みんな田をつぶつて・・・」

「1・・」
「2・・」
「3！－！」

未来

12 未来

「ユカ、起きなさい、時間よ」

長いまどろみから覚めたようなぼんやりとした感覚、それは風邪をひいて熱を出し、ずっとふとんにくるまれていたあと、寝汗とともに回復した体を久しぶりに起こす。そんな感覚にも似ていた。

「ユカ、7時よ」

「ハ、ハハ？」

田を開けるとそこには見慣れた顔、でもちょっとした違和感、白髪混じりの髪と少しやせたように思える「ハハ」の顔は優しい面持ちは変わらずとも明らかに時の流れを映しだしていた。

(み、未来へ来たんだ・・)

「大事な入社式に遅れたらどうするの」

「入社式？」

「何、寝ぼけてるの、夢だったアナウンサーの記念すべき初日でしょ、しつかりおめかしして行きなさい」

「アナウンサー？あたしが？」

「ほんとに大丈夫、大学院に行つてまで手に入れた夢でしょ、早く支度しなさい」

(あたしは、未来へ来たんだ、本当に来たんだ。そして記憶は・・昔のまま・・)

(えい、落ち着け、冷静にならなくちゃ)

(口クちゃんを助ける、記憶が昔のままならきっとできる、でも今
の事がわからない・・)

(でもやるしかない、覚悟してきたんだもの)

ユカは混乱する頭を整理しながら、ベッドから体を起こす、そして顔を洗った後はハハに言われるままに着替えを済ませた。生まれてこの方着たこともないスーツに身を包み、ユカは初めて未来の自分が鏡に映す。

(これが、あたし・・)

そこには紛れもなく12年後の篠宮由香の姿があった。

(自分じゃないみたい・・)
(あつネックレス)

ユカの首にはあの時のガーネットのネックレス。

「ゆ、指輪は！」

「あつた」

机の上のガラスの皿の上にあつた指輪をユカは鞄の中のポーチに大事にしまった。

(これだけは・・常に持つてなくちゃ)

「おめでとう、ユカ」

「あつ、チチ」

「今日からテレビでユカを見られると思つて楽しみでいつもより早く起きちまつたわい」

「何言つてるのおじいちゃん、入社1日目からすぐテレビに出る

「わけないでしょ」

「じいちゃん、昔とあんまり変わらない」

ユカは未来へ来て初めてクスツと笑つた。

「何なの昔つて、さつ朝食にしましちう」

「ね、入社式の案内は？」

「タベカバンにしまつてたじゃない、一〇時からでしょ」

「あつあつた」

『テレビ瀬戸内 入社式 於 本社ビル 9時半までに元々来場くだ
れ』

(とにかく、なるようにしかならない、行くしかないよね、でもよ
かつた・・地元で。知らない場所だつたらロクちゃんを探すぞ!)
(じゃないもの)

(あたし、できぬ、順応性あるんだから、わからなかつたら何でも
聞いてえばいい、ロクちゃんを助けるためなら何だつてやる)

ユカは自分で自分を叱咤するよりはつべたをつねつてみた。頬
に感じた痛みは今が夢ではなく確かに現実だとこいつことはつきり
と物語つていた。

「じゃ、行つてきます」

「行つてらつしゃい、氣をつけてね、今晚はお祝いにあなたの好き
なトマトシチューで待つてるわ」

「ありがと、ハハ」

「ユカ、がんばれよー」

「じいちゃん!うん、行つてきまーす」

小さな庭を抜け、昔ながらの格子戸をくぐつコカは朝田の中を飛び出す。

「あっ、がらくた館！」

家を出たコカの目に飛び込んできたのは「がらくた館」だ。

（まだあつたんだ、よかつた・・・マスター元気かな、まだ開店前か・・）

坂道を港のそばの駅に向けて早足で歩くと分かれ道にはやはり見慣れた店が。

「リムーもあるー。あつおじわんー。」

「サラーム クカちゃん」

「何だい、おじさん ちょっと老けたね」

「うん、何だかわからないけどそうみたい」

「ほれ、お祝い、持つておいで」

「あつエメラルドレモン」

「緊張した時に紅茶に入れて飲むといい、コラックスすること間違いないし」

「ありがと、感謝」

手を振るおじさんを背中にコカは眼下の町を眺める。そこには昔と変わらぬ町並、青い海と緑の小島、連絡船が忙しそうに行き交つミーチュアのような光景が広がる。コカは心から安堵する。

（あたしの町はずっと変わっていないんだ）

「」の景色がこれからめぐらしく会つであろう予想もしないさまやまな出来事に対する不安を打ち消してくれる何よりの強い味方のような気がした。

(みんなはどうしたんだろう・・・)

(会場までは30分ぐらい、まだ時間がある、どうしたらいい?)

「やうだ、携帯だ！」

ユカは思わず声に出した。

(きっと携帯にみんなの連絡先があるはず)

ユカは鞄の中に携帯を探す。

手の平に隠れるほどの小さくても洒落なガラスの板のようなものが、目に入る。

「これかな」

手に持った瞬間に透明なガラス板は一瞬にして通信機のような映像を表面に映しだした。

「ひえ！進化してる 薄いし軽いし」

「どうやって使うんだろ」

「複雑でわかんないよ、もうこいつなつたらヤケだ」

「志水佳澄！」

ユカはじーちゃんの名前を携帯に向けて呼んでみた。

「あっ、出てきた！さすが未来」

ガラスの表面には名前と大人になつたしーちゃんの顔が立体的に浮かび上がった。

「しーちゃん、すごーい！大人っぽい」

「えーと、次は・・内山京司！」

教授の顔が同じように浮かび上がる。

「教授だ。あんまり変わつてない、メガネがちょっと派手じゃない、教授のイメージとちょっと合わないかな」

「そして最後は・・漆山 航！」

ユカはウルシの名前を呼んだ。

「あれっ？」

「名前間違えたつけ」

「もう一度、漆山 航！！」

ユカは一度目よりも大きめの声で携帯に向かつてウルシの名前を呼んだ。しかし、時間がたつてもウルシの顔が浮かび上ることも、名前が現れることもなかつた。

「どうして？ウルシが出てこない・・・」

はじまり

13 はじまり

「もしもし、しーちゃん」

「もしもし」

「しーちゃん、あたし、ユカ」

「ユカ？連絡待ってたわ。さつき教授からも電話があったの」

「記憶、もとのままだつたね」

「そうね、ユカは何してるの」

「聞いて、あたしテレビ局のアナウンサーになつてた、しーちゃんは」

「うん、劇団に入つて、夏の公演の主役よ、来週から舞台稽古が始まるらしい、日記に書いてあつたわ、自分の日記を見て知るなんて何だか変な気持ち」

「あたしもこれから入社式に行くところ」

「そう、とにかくみんなで会いましょう。今日はお互い無理ね。明日は土曜日だから10時に神社で、教授もOKだって」

「うん、わかつた、あつウルシは」

「それが携帯に連絡先がないの、ユカは」

「あたしも、どうして？」

「わからない、でも仕方ないわ、とりあえず3人で」

「了解、今日1日うまくやつてね」

「ええ、ユカもね、自分自身の役をやるなんてヨーロージカルでもめつたないわ、演技の練習と思つて頑張つてみる」

「じゃ、そろそろ行かないと遅刻だから」

「それじゃ」

(よかつた)

ユカはひとまず安堵した。町並も家族も昔と変わらずに自分を迎えてくれた。あの子の言った通りだった。しかし、現実とは大きな隔たりがある。本来なら輝かしい未来での新しい毎日のスタート、胸をときめかせる人生の幕開けだろう。けれども24歳の体に12歳の心、そこにはとまどいと不安がよぎる。

何よりも4人には口クを救うという大きな宿題があつた。ユカは気を引き締め直し駅への坂道を駆け下りた。

田の前には10階建てぐらいだろうか、大きなビルの入り口にひつきりなしに多くの人々が足早に吸い込まれていく。

「おはようございます、新入社員の篠宮です」

「おはよう。こりや偶然だ、アナウンス部の久本です、面接の時に会つたね、覚えてる？」

「あ、いえ・・・緊張してたんで」

「そうだな、こちらへどうぞ、一緒に行こう」

「あの、入社式は・・」

「ああ、詳しいことは知らせてなかつたね、入社式といつても会社全体でやるような儀式はないんだ。なにしろ地方の小さなテレビ局だから忙しくてね、それぞれの部署で独自に新入社員を迎えるというわけだ」

「そうなんですか」

「アナウンス部の新入社員は君ひとり、歓迎するよ」

「えつあたしひとりだけ？」

「そう、地方局といえども倍率は100倍だぞ、よく頑張ったな」

「ひ、ひやくばい！」

「応募の時にわかつてただろ」

「あ・・はい」

「ここだ、さ、入つて」

「はい」

「部長、新人アナウンサーの篠富さんです」

「し、篠富です、よろしくお願ひします」

「峰岸です、ようこそアナウンス部へ」

「女性の部長さんなんですね」

「めずらしい?」

「い、いえ、かつこいいですね」

「あら、ありがと、じゃ入社式といきましょうか」

小さな部屋のブラインドがすっと上がるとなたんにまぶしいまだ若い朝の光があたりを温かく包みこんだ。

「では、あらためましてよつこ内テレビ瀬戸内アナウンス部へ、じやみんな自己紹介」

「アナウンス部次長の久本だ、よろしく」

「原田です、6年目で朝のニュースを担当しています」

「山梨といいます、僕は4年目、しばらくの間はぼくについて勉強してもらつのでよろしく」

「あと一人は今仕事中、お昼のニュースの打ち合わせ、ほらあそこを見て、スタジオの中にいるわ」

ガラス越しのスタジオの中からヘッドホンをかけたかわいらしい女性が手を振る。マイクを通して声が飛んで来る。

♪久保木恵です、よろしくね♪

「篠富由香です、よろしくお願いします」

「以上。あなたを含めた6人で全員よ」

「少なくて驚いたら、この春に1人結婚退職した子がいて君がその後任だ」

「大きなテレビ局なら何ヶ月もかけて一人前に育てるのでしょうか
ど、ここでは即戦力になつてもうから覚悟してね。今日はこのあと局を案内して一通りの事を教えます。分厚いマニュアルをプレゼントするからこの土日で全て覚えて来る事。来週からは研修を兼ねて山梨君の取材に同行してもらうから、仕事を覚えていてね、いいかな」

「は、はい！」

「よろしい、がんばってね」

心臓の鼓動が指先まで伝わってくる。あたしがアナウンサーに・・・
12歳のあたしはまだ夢も持てず、はつきりとした夢を描いて頑張る仲間たちから取り残された気がしていた。

(これがわたしの未来・・・うつむ、現在・・・)

何もかもが新しく、何もかもが驚き、時を越えていきなり飛びこんでしまった大人の世界にユカは戸惑いつ。

(これが大人の世界なんだ、挨拶一つでもテキパキとして、みんななんて素敵なんだろう、なんて輝いてるんだろう)

1日があつという間に過ぎる、こんなに早く流れる時間をユカは初めて体験した。見学するスタジオも、そこで生き生き働く人々の姿も、峰岸部長から聞く話のひとつひとつも、全てが新鮮な驚きに満ちていた。

「さつこれで一通りの事は教えたわよ、何か質問はある?」

「い、いえ、何から聞いていいのか・・・」

「はは、そりやそうね、わからないことは聞く、初めは何を聞いても恥ずかしくないわ、そのかわり一度覚えたことは忘れましたじや

許されない、それが仕事の世界よ、わかつた

「はい」

「じゃ、7時だし今日はこれで帰つていいわ、はい、これは今日の話をわざわざ詳しく書いたマニュアル、月曜日までの宿題だから、しつかりと覚えて月曜日に今日と同じ時間に来てちょうだい」「わかりました、さよなら、じゃなかつた 失礼します」

再会

14 再会

長い石段を登る、少し登つては振り返り確かめるように眼下の町並みを眺める、次第に開けていく視界、石段を登りきった鳥居にもたれながらユカは大きく一つ深呼吸をした。

「ユカ」

背後から聞き覚えのある声がした。

「しーちゃん！」

「ユカ素敵、12年ぶりなのかしら、それとも2日ぶりなのかしら
「しーちゃんもまるで別人、でも声は変わってないね」

「お待たせ」

「教授！」

「何だか自分じゃないみたいで照れくさいんだけど」

「大きくなつたね、見上げるくらい」

「派手なメガネ、ちょっと似合つてないよ」

「今の流行らしきよ」

「教授の未来はどうだつたの」

しーちゃんがうれしそうに笑顔で問いかける。

「うん、大学院で宇宙工学の研究をしている、子供の頃の、いや、
一日前の僕が思い描いていた通りの未来になつてたよ」

「ウルシとは連絡取れた？」

「いや、携帯に連絡先はないし、じつに連絡も無い」

「何でなんだろ、あたしたちはこうして会えたのに」
ユカが首をかしげてみせた。

「わからないわ」

「連絡先がないと知つてからすぐに調べてみたんだ、僕たちが夢を

叶えたようにウルシもプロ野球の選手としてきっと成功してゐるはずだ、ネット上で検索すればきっとわかると思ってね」

「で、どうだつた？」

「すぐに出てきたよ」

教授は取り出した携帯端末のガラス盤の1箇所を軽く指でたたいた後、そこに向けて呼びかけた。

「ウルシヤマ ワタル」

硝子盤はしばらくすると画面に映像を映し出した。

「声で簡単に検索できるんだ、何万件とヒットしたけどトップに出てきたよ、ほら」

教授がガラスのスクリーンを2人に見せると、精悍とした顔つきのピッチチャーがダイナミックな投球フォームで目にも留まらぬ速球を投げ込む姿が立体的に浮かび上がった。

「ウルシだわ、なんか、かっこいい」

「ホント、でも間違いなくウルシ」

《漆山航 24歳 プロ野球山陽ドルフィンズ 投手 私立聖海学院高校から聖海大学卒業後、ドラフト1位指名にて入団、持ち前の速球と勝負度胸のよさで1年目から活躍、14勝を挙げ新人王を獲得、2年目も15勝を挙げて、長年低迷を続けてきたドルフィンズを2位へ躍進させる原動力となる、入団3年目の今年は念願の優勝に向けて更なる活躍が期待される》

DJ風のナレーションが読み上げられた後、立体映像はウルシの

投球フォームを映し出し、続いて血PCRが流れた。

「ドルフィンズの漆山航です、今年は優勝目指して投げまくります、みなさん応援よろしくお願ひします！」

ウルシの笑顔を最後に映像は終わり、ウルシの顔もスクリーンの中に戻り動きを止めた。

「カツコイイ！」

ユカが指を鳴らしてみせた。

「やつぱり夢の通りね」

「うん、ドルフィンズはずつと弱かつたから全国的にはまだまだらしいけど、地元じゃ知らない人はいいくらいのスターだ」

「すごいわ」

「それから、志水さん、もうひとついい物を見つけたんだ」

「何？」

「ほら、これや」

『新春特番 ドルフィンズ期待のエース漆山航選手、新進気鋭の建築家園田禄氏、地元出身の若手2人にロングインタビュー』

「口クちやんだ！」

「2人は地元出身の期待の若手として今年のお正月にインタビューを交えて対談してるんだ」

「じゃ、口クちやんと会うのも簡単ね」

「でも、どうしてウルシは連絡してこないのかしら」

「うん、そこがわからないんだ」

「それが謎よね、教授でもわからないなんて」

「僕らの記憶はこうして残ってるし、たとえ何かの理由で携帯に連絡先が無いとしても、何らかの方法で僕らを探さないはずは無い」

「僕らの記憶はこうして残ってるし、たとえ何かの理由で携帯に連絡先が無いとしても、何らかの方法で僕らを探さないはずは無い」

「有名人だしきつと連絡したくて出来ないんじゃないのかしさ」「しーちゃんがしぐくもつともな理由を口にした。

「それは一理ある、でも志水さん、僕たちが未来へ来たと理解した瞬間、最初に思った事は何?」「

「うん、確かに最初は驚いてしばらくなは混乱したんだけど、とにかくみんなに会いたかった、話したかった」

「僕も同じだ」

「私も!」

ユカが勢いよく手を擧げる。

教授はしーちゃんを見ながら話を続けた。

「だからウルシが連絡してこないわけはないんだ、絶対に!・

「しばらくなは待つしか・・ないのね」

「それから・・・

「何?」

「僕はもう一つ大変な事に気がついた」

「えつ大変な事って?」「

「志水さん、あの日の新聞のこと覚えてる?・

「あの日つて、神社に集まつた日?・」

「ロクちゃんが撃たれるつて記事・・

「ユカが話に割つて入つた。」

「そう、それで僕らは決心したんだよね、ロクを救うために未来へ行こうつて」

「ええ

「うん

ユカとしーちゃんはお互いに顔を見合せた後、確かめ合つようこ

同時に返事をした。

「篠宮さんはあの時の新聞の日付、覚えてる?・

「つづき」

「僕はとつさに日付を見た」

「いつだったの?・

「それが・・9日後の4月11日

「えつ！ホント」

「うん、年号も日付も僕の頭にはっきりと残ってる」

「つまり、あの・・教授、どういうことになるの？あたし、頭がこのがらがつてわかんなくなっちゃった」

ユカは人差し指を頭の上で渦を描くように回して見せた。

「うん、あの時の新聞記事には前日の朝に日本を発つたと書いてあつた、4月10日だ。だから、7日後、つまり来週の土曜日、4月9日までに口クに会つて何としても引き止めなくちゃならないんだ、外国に行かれたら今の僕らにはどうしようもできない。」

「もし、それができなかつたら・・・」

しーちゃんは事の重大さを今あらためて認識したようになつぶやいた。

「口クは撃たれる・・・

未来へ跳んでから知らず知らずに浮かれた気持ちなつていた3人の中に再び大きな緊張が芽生えた。

「何からやればいいの」

ようやく事態をのみこんだユカが不安そうな面持ちで教授の眼を見つめた。

「とにかく、僕らは口クに会つ、会わなければやぢつてもできない、これから帰つて口クのことをみんなで調べよう、全員で一緒に調べるより効率的だ」

「みんな、メモできるものある？」

「何、しーちゃん」

「いい、これからあたしが言つことをメモして！記録を残すの、次に会うのは今夜の7時、場所はがらくた館で」

「それぐらいあたしでも覚えられるよ」

ユカが不満そうに口をとがらせて見せた、教授はしーちゃんが何

を意図しているのかを理解しゆっくつとうなづいた。

「違うのよコカ、よく聞いて、ウルシと連絡がつかなくなっているよつこ、あたしたちもいつどうなるかわからないわ、記憶が失くなつたら最後、あたしたちは再会することも、もちろん園田君を助けることもできなくなるの、でもメモを残しておけば万が一記憶を失くしてもこのメモが私たちをつなぐ細い命綱になるかもしれない」コカはしえちゃんの言葉をひとつひとつしっかりと聞き取りながら、その重要性を認識し、大きくなづいてみせた。

「わかつた、さすがしえちゃん！」

>/spa

15 現実

カラカラカララン。乾いた鈴の音に続いて外の雨の音が店の中になだれこんできた。

夜になつて降り出した雨は時間を追うごとに激しくなり、傘をさしていくても意味がないぐらいに夜の街になだれおちる。

「いらっしゃい」

「こんばんは、すごい雨、急に降り出して、まいった、まいった」「ユカちゃん、まだお祝いを言つてなかつたね、就職おめでとう」「ありがとマスター」

「ユカ」

「じーちゃん、教授、2人とも早かつたね、あたしが一番近いのに」「もう長ことお待ちですよ」

「あたし、レモンティー。それから秘密基地借りていー?」

「どうぞ、この雨じやお客様も期待できないし、じゅうくり」

店の奥にある窓辺のテーブル席、>あの頃くから秘密基地と呼んでいたスペース、窓をたたく雨の向こうに港のあかりがぼやけて見える。三人が席を移ると同時にユカが教授に問いかけた。

「どうだつた、何かわかった?」

「いや、僕はとにかく口クの事を調べまくつてみた」

「それで?」

「うん、口クは高校2年で飛び級して、大学の建築家に入学して、その2年後の19歳の時に世界でも有数の建築デザインコンペで史上最年少グランプリを獲得していた、正に口クの夢に描いていた通

りの未来だ

「私も見たわ」

「驚くことじや・・ないよね」

「うん、大切なことはどうやってあいつに会えるかってことだ」

「あたしも口クちゃんに関する資料はできる限り目を通した、でも連絡先と言えば大学の代表番号ぐらい、電話してみたけど取り次いでもらいうなんてとてもとも・・」

「そうだら、今の口クは世界的にも有名な建築家だ、簡単に会うなんてことはできないと思った方がいい」

「でも、時間がないよ、一週間以内に会つて連れ戻さなくちゃ」

「そりなんだ」

「でもどうやつて」

「ユカはあらためて現実を突きつけられる、未来へ来た昨日は何だか夢のようで新しいスタートに心浮かれてさえいる自分がいた。しかし、時間がない、間に合わなければ口クちゃんが死んじゃうかもしれない、何としても見つけなくちゃ・・。

「とにかく3人で出来る限りの事はしよう、僕は明日あいつの大学まで行つてみようと思う、日曜日だから会えないとは思うけど」

「ユカ、園田くんの昔の家つてこのすぐそばじゃなかつたかしら?」

「うん、行つてみたよ、市営住宅はなかつた。老人ホームと小さな公園に変わつてた」

「そう・・」

「明日は休みだしあたしも一緒に行く

「私も行くわ」

「よかつた、やつぱりしーちゃんがいないとね

「わかつた、月曜日からはそれぞれ仕事に行かなくちゃいけないから身動きが取りにくくなる、明日のうちに口クに会える可能性のあることはやれるだけやってみよう

「じゃ、メモとつて」

「4月3日・日曜日・朝の9時に水島駅の改札に集合」「了解」

激しい雨は相変わらず窓をたたき続けていた、窓に映る赤レンガでできた壁もしつとりと湿り気を帯び、ふと触れた指先から冷たい感触が伝わる。

「極秘会談は順調かな」

「あ、マスター」

「雨の中をわざわざ来ててくれたお礼に、はいこれはサービス

「わ、うれしい」

「レモンケーキね」

「ありがとうござります」

「マスターありがと、相変わらずやさしいね」

「そりゃあ、ユカちゃんは大切な常連さんですからね、そのうち取材に来てよ

「うぬ、おぬし、なかなか商売上手」

「実は、口クちゃんを探してるの」

「口クちゃん?」

「うん、口クちゃん、この先の市営住宅に住んでた、小学校の頃よく連れて來たでしょ」

「さあ、僕も仕事柄一度來たお客様さんは忘れないつもりだけじ」

3人は何かを感じ思わず顔を見合わした。

「私たち2人は?」「志水さんと内山君」「マスター、ウルシは?」「ウルシ?」

「やつぱり小学校の頃に何回か連れてきたんだけど」

「これはまた、どちらもずいぶんと昔の話で」

「わからない・・ですか？」

「初めて聞く名前ですね」

「そう・・・」

再び3人は顔を見合わす。そして、互いに何かがわかったという意思を交換し合うように小さくうなづいた。

「いえ、僕らの共通の友人を明日探しに行くんです、会えるかな」「そうですか、何やら事情があるみたいですね、でも大事なことは願い続けること、もし会いたいと思っているならそれを念じ続けること、と僕は思います」

「願い続ける・・・」

「そう、希望を叶える最大かつ絶対の条件は思いを持ち続けること、それをやめた時点で希望は失望へと姿を変え、やがては絶望という黒い塊となつて心をむしばんでいくものです」

「うん、マスター、わかった」

「明日はきっと会えるわ」

「いや、絶対に会おう」

降りしきる雨は窓の外の世界から他の音を奪つかのように相変わらず激しく地面を打ちつけていた。

「じゃ、明日」

「1つ宿題が出たね」

「えっ、何？」

「マスターはロクとウルシを知らなかつた、これが何を意味するか」

「あたし、ロクちゃんをよくがらくた館に連れてきたの、ウルシも確か3回ぐらいい」

「もちろん1・2年前の話だけど、なぜ2人だけがマスターの記憶から消えたのかってことだ」
「ええ、それがわかれば2人と会えるかもしれないわね」

16 訪問

口クが研究を続ける大学院は水島駅から列車で30分ほど離れた小さな駅からさらにバスで約15分、緑あふれる景色の中にある一枚の風景画のように静かにたたずんでいた。

にぎやかな大学のキャンパスから少し離れ、ひつそりとした山間の研究所といった風情だ。夕べの雨が上がり、正門へと続く小路のそばには草花が昨夜の雨のしづくをしつとりとまとい、森の奥からは小鳥のさえずりが耳に心地よい。

ユカは思い切りひとつ深呼吸したあとじーちゃんの方を見る。

「素敵なところね」
「ええ、あつ見て」
「記念碑だ」

じーちゃんの指の先には高さ2mほどの石碑が朝露に濡れ、朝日を浴びてキラキラと輝いていた。

^園田禄先生 世界デザインコンペ グランプリ受賞を記念すべ

「いよいよ、ユカ」
「会えるかな」
「とにかく当たって砕けろだ」
「正門、守衛さんがいる」

3人はお互いに顔を見つめ、大きく一つ深呼吸をする。教授が守

衛室へ声をかけた。

「おはよ(ひ)」やこます

「おはよ(ひ)」やこます、どちら様ですか

「あの、僕たち園田先生の友人なのですが、今日、先生はおいでですか

しうか

「園田先生のお友達ですか・・・アポイントは

「いえ、近くへ来たのでちょっと会いたくて寄つてみたんです」

「ええと、それは幸運かもしれない、今日は日曜日だけど先生は研究でいらしてますから連絡してみましよう、ここに名前を書いてください」

3人の顔がかすかに緩む、教授が代表して受付用紙に名前を書き記した。守衛室から電子音が流れる。

「テレビ電話だ・・・」

「あ、おはよ(ひ)」やいいます、先生

「口クちゃん!」

画面には子供のころの面影そのままの口クの姿が映し出された。ユカは思わず声を出してしまう。

「先生の『ご友人』という方が3名お見えです、アポイントがないのですがどうされますか

「友人?名前は?」

「はい、内山さん、志水さん、篠富さんだそうです

「内山?聞いたことがないな

「えつ、ご友人では

「いや、知らない、最近嫌がらせの手紙が届いたりと何だか物騒だととにかく断わってくれないか」

「はい、わかりました」

守衛は先ほどと打って替つて、厳しい表情をたたえてユカたちの方へ詰め寄るように歩み寄つた。

「君たち、先生は君らを存じ上げないそりだ、一体誰なんだ」

「いや、僕ら小学校時代の友達で、12年ぶりに訪ねてきたものですから、先生も忘れているんだと思います」

「本当かい？」

若い守衛の男性はいぶかしそうに3人の顔をじっと見つめ、さらに怪訝そつな声で言葉を続ける。

「ここにとこる、先生へのやつかみからか時々君たちのように先生をいきなり訪ねてきては何やらわけのわからない言いがかりをつけやつらがいて迷惑してんんだ、通すわけにはいかないね、帰つてもらえますか」

（なるほど、命を狙われるくらいの有名人なんだからそんなこともあるのかもしねり）

教授は冷静に考えた。そして、せつかくながりかけた糸をきてはなるものかという想いで・・・

「お願いです、じゃ、せめてそのテレビ電話で話させてもらえませんか、顔を見てもらえれば怪しい者かどうかわかりますよね」

守衛は少し考えた後小さくうなずき答えた。

「なるほど、いいだね」

「ありがとう」「それ、まわす」

「あたしに話させじ」

「ユカ・・頼んだわよ」

テレビ電話が再びつながり口クの声がスピーカー越しに聞こえた。

「あつ、先生、先ほどの『友人』という方が電話でお話がしたいと言つていますが」

「うん？・・わかった、いいだろ？」

（口クちゃん・・お願い、あたしを覚えていて・・・）

「こんちには、口クちゃん！・・いえ、園田先生、あたしの事わかれますか？ユカ、篠宮由香です、小学校の時同じクラスで一緒に6年間サマーキャンプに行きましたよね」

「しのみや・・ゆか・・」

「ほら、家も近所でよく一緒に学校から帰つたじゃないですか」

「・・・すみません、失礼ですがあなたとは初対面です、誰かと勘違つたれてるんじゃないかもしれませんか？」

「口、口クちゃん・・・」

「申し訳ありませんがお引き取り願いますか」

「先生、先生の身に危険が迫つてるんです、お願ひします、少しの時間でいいんです、会つて話をさせてもらひませんか、お願ひします」

「僕に危険？・・見知らぬ人と会つて話す、そのことの方がよっぽど危険です、今のお話を聞いてあらためてお会いするのはやめようと思いました」

「お願ひです、10分、いえ、5分でいいんです」

「お断りします、忙しいので切らせてもらいますよ」

よつやくつながった1本の細い糸が無機質な電子音とともに切れの声をユカはなすすべもなく聞くしかなかった。画面が切れた瞬間

涙が一筋ユカの頬をつたつて落ちた。

「ロクちゃん・・・」

「ほり、言つた通りだ、帰つてもらえますか、これ以上じつじつ居座るのなら警察へ連絡させてもらいますよ」

「ユカ、仕方ないわ」

「しーちゃん・・ロクちゃん、そろそろのこ・・」

崩れ落ちる様子のユカを2人は抱きかかえるようにして、2、3歩引き戻す。

「すみません、失礼しました」

守衛に謝罪の言葉を述べた後で、しーちゃんは続けた。

「あの、『迷惑でしうがこれだけ先生に渡していただけますか、私たちの小さい頃の写真です、もしかすると思い出してくれるかもしれないで・・・』

「写真・・わかりました、それくらいならいいでしょう、そのかわり今日のところはこのまますぐにお引き取り願いますよ」

「わかりました、ありがとうございます」

「しーちゃん、『めん、あたし・・・』

「いいのよ、ユカ、よく頑張ったわ」

しーちゃんに慰められながらも、ユカは情けなさとほがゆをひとくち頬を伝いこぼれる涙を止めることができなかつた。

チャンスのしつぽ

17 チャンスのしつぽ

「せつかくのチャンスだったのに・・・」

「うなだれながらつぶやくユカに教授が肩をたたき優しく励ます。

「当たって砕けろって言つたら、これも予想の範囲内だよ
「でも、これで口クちゃんに会つのは難しくなつちゃつた、ほんとにゴメン」

「気にしない、気にしない、志水さん、せつきの写真は?
「ええ、ここにもう一枚あるわ、ほら
「あつこれ6年生の時の進級写真」

ユカの眼にハツと光が戻つた。

「そう、5人揃つて学校の池の前で撮つたやつ、覚えてるでしょ、
△3ヶ月前△の事ですものね」

じーちゃんは写真を見せながらユカの顔を見つめた。

「えつ、でもこれ・・・」

ユカは見覚えのある写真を見てすぐに違和感を覚えた、そこには5人いるはずが2人足りないのだ。

「そう、私たち3人しか映つてない、園田くんも漆山君もいないの」
「△の写真からも証明できる、口クもウルシもこの未来では僕らとはつながっていないんだ、だからきなり訪ねて行つても断られて

当然なんだよ」

あらためて教授がユカの肩をたたいてみせた。

「でも、どうして・・・」

「わからない、でも、逆にこう考えるんだ、なぜ僕らは昔の記憶のままつながっているのか、それがわかれればロクやウルシともまたつながれるんじゃないかなって」

しーちゃんが納得したようにうなづいた、そして一人の目に見えないところで小さくこぶしを握った。

「やるしかないわ、ただ時間が・・・」

「うん、でもほんう約束したじゃないか、やれるだけの努力をするつて、僕は父さんからいつも言われてたんだ、チャンスは何度でもやってくるつて、それに気づくか気づかないかが最初のポイント、そしてその次が最大のポイント」

「何?」

ユカとしーちゃんは思わず声を揃えて教授の顔を見つめた。

「見つけたチャンスのしつぽをつかんで離さないこと。いい、この1週間で必ずロクに会えるチャンスは訪れる、3人でのしつぽをつかむんだ」

「うん、教授頼もしい、あたし本当に尊敬しちゃう」

「照れるな・・・

「今日はどうしましょう」

「2人は帰つて、ここにいても進展はないし、篠宮さんはロクの自宅を何とか調べてみてほしいんだ、家が近所だよね、近くでロクを知っている人がいれば写真を撮ってきてほしい、今度ロクに会えた

時に信用してもらえるかもしれない」「了解」

「あたしは?」「

「志水さんは6年の時のクラスの誰かを見つけて、僕らと違つて口クの記憶に残つていればこれも接点になるかもしれない」

「わかつたわ、それで、教授は?」

「うん、ちょっと考えがあるから・・・」

「じゃあ、メモ」

> 4月3日 夜7時 がらくた館にて集合 <

「明日からはお互い仕事になるけど、メモを取つてどんなに遅くなつてもその日の夜には必ず落ち合おう」

「わかつた、じゃまた今夜」

「うん」

「ええ」

ユカたち2人は森の中を駆へと引き返す、教授はジャケットを肩にかけるとおもむろに田の前の建物に視線をやつた。

「さて・・と」

(ここまで来て手ぶらで帰れるか)

教授は小走りに建物の裏へと向かう。

(大学院の研究室、刑務所つてわけじゃない、そんなにセキュリティーが厳しいことはない)

口クは木陰に隠れた低い塀を乗り越え庭に忍びこむ。日曜日の人気のない周辺は人目につかず好都合であった。

(さつきのテレビ電話、口クの背中越しの窓から桜の木が見えてた、
あいつは桜の木の見える一階にいる)

辺りを警戒しながら建物の周りを見て回る。

「思つた通りだ、正門以外は特に見張られてもいなし監視カメラ
らしきものもない」

「あつた！あの桜の大木・・といつことは」

教授の目が建物の1室をとらえる、静かな裏庭に面した人通りも
少ない場所だ。教授は窓の下に身を潜め、ゆっくりとひざを伸ばし
ていく。

（いた！口クだ！ どうする？）

（落ち着いて考えるんだ）

（入つて声をかける・・いや、ダメだ、さつきの今だ、いきなり話
しかけたところで大ごとになるだけだ、僕とわからない以上入つて
きたのはただの怪しい人物、冷静に話を聞いてもらえるはずもない）
（でも、せつかくここまで来たのに・・）

（いや、あせるな、下手なことをすれば、それは自分からチャンス
のしつぽを谷底に向かつて投げるようなものだ）

教授は自問自答を繰り返す。父親からいつも教えられていた合理的な考え方、これこそが教授の最も大きな武器だった。

（会つのはまずい、あとでわかる」とは・・）

「先生」

ドアをノックする音とともに誰かの声が聞こえた。

「学生が論文の相談来ましたけど」

「ああ、約束してある、面談室に通してあげてくれ、すぐに行くよ」

口クはそう言つと研究室を出ていく、カギをかけて・・しかし、窓の隙間から入り込む春風は窓際の白いカーテンを優しげに揺らしていた。

(あいつ、この辺は変わつてないな)

(チャンスのしつぽ・・・)

教授は静かに窓を開け、自らの身を持ち上げ部屋の中に落とし入れる。懐から取り出したのは小型のカメラ、1秒間に3枚は撮れる速射砲みたいな優れものだ。

(よし、何かわかるはずだ)

教授は部屋中のあらゆるものに向けてシャッターを押し続ける。壁、本棚、床、ソファー、机の上、キャビネットそして・・

(さあ、最後だ)

辺りを見回し人の気配がないことを確認すると静かに机の引き出しを手前に引きよせた。ものの5分足らずの時間が冷静な教授にも1時間近くに感じられた。

(終了) 口ク「めん・・・れも口クを救うためなんだ)

再び窓を乗り越え教授は春の日差しの中にいた。まだ花冷えとも言える春の風が教授の汗をひんやりと包む、教授はひとつ小さなくしゃみをすると足早に走り去つていく。

全てを見ていたのは庭に咲く満開の桜の大木だけだった。

手がかり

18 手がかり

「おはよびげでいります」

「おはよづ。宿題は大丈夫?」

「あつ、はい、大丈夫です」

「よろしい、じゃあ今日の夕方テストするわね、局の中のルールとアナウンサーの基本の基本、最初に話した通りここでは仕事を覚えながらの促成栽培だから、懇切丁寧な研修はないと思ってね、そのかわりわからないことは何でも聞いていいから、今だけよ、何を聞いても許されるのは」

「わかりました、それで今日は」

「篠富さんの最初の仕事は、あつ山梨君」

「はい、部長」

「今日の取材、篠富さんを連れてつて

「了解です」

「じゃ、あとは彼に聞いて、しつかりやるのよ」

あわただしい1週間が始まる。テレビ局に土日はあまり関係ないが、それでも月曜日は不思議と気持ちが新しい。

「じゃあ、篠富くん・・でいいか、こいつを持つて

「はい、何が入ってるんですか」

「まあ、色々だ、取材に関するグッズ

「か、かなり重いですね」

「カメラマンも一緒に行くから、機材を持つのも新人の仕事と思つ

て

「山梨さんは4年目でしたつけ

「やうだよ

「そりは見えませんね

「どういう意味？」

「いや、しっかりしてらつしゃるので」

「これは、どいつも、何となくわかると思つたけど」」」では自分で仕事を覚えていく、だから、覚えるのも早いんだ。勉強と同じだよ、押しつけられた知識はすぐに忘れるけど自分から覚えた知識は簡単には忘れない、この職場は何でもやらせてくれる、責任は重いけどやりがいがある、頑張るぜ」

「はい、わからない」とは何でも聞きます、一度で覚えるようにするのでようしくお願ひします」

「OK、いい心がけだ」

「今日はどこへ行くんですか」

「山陽スタジアム」

「野球場？」

「ああ、12時から今をときめく地元のスターのインタビューだ」

「地元のスター・・・」

「漆山航、名前ぐらいは知つてるだろ」

「えつ！漆山航！」

「その反応は、さてはファンだな」

「い、いえ・・あたしと同じ水島の出身なので」

「その通り、せつかくだ、インタビューの最後に2、3質問のチャンスをあげるから考えておくんだな」

(ウルシに会う・・何でこと・・うつぶ、これはきっとチャンスのしつぽ・・)

「よし、出発しようか、」おひらはカメラマンの有さん、今日まだオとスチール両方お願いします。」

「ほいさ、機材は新入りさんが持つてくれるのかな」

「あ、はい、篠宮とあります」

「カメラマンの橋本です、ドライバー兼任」

「じゃ、行きましょっ」

3人を乗せた車は、海沿いの道を春のまぶしい日差しを浴び軽快に走る。ユカはウルシに会えると思うと胸の鼓動が高鳴るのを抑えられなかつた。

「有さん、車、充電大丈夫ですか」

「おお、100%だ、こないだは悪かつたな、途中で電池切れなんて」

（電気自動車なんだ・・）

「おつ見えてきたぞ」

海辺に巨大なドーム型の建物が見える。車が近付くにつれてそれは大きく羽ばたこうとする白い鳥のように優雅な姿を3人の前に現した。

「おはようございます、テレビ瀬戸内ですが、漆山投手の取材にきました」

「おはようございます、球団広報の中村です。ちょうど練習が始まつたところですからどうぞ」

スタジアムの入り口から緩やかなスロープを上がり切るといきなりパツと視界が開けた。

「き、きれい！」

「素晴らしいでしょ、チームはまだまだ発展途上だけどこのスタジアムは日本一美しいと思つてます」

中村は誇らしげに親指を立てて見せた。

一面の白い壁に鮮やかな緑の芝生、空の青がまるで絵の背景のようだ。

「白い色がくすまないよつに円に1度は新しく塗り替えてますから」「ほんとにおいな球場ですね」

「あそこ」で投げてるのが漆山です、まだ朝早いけどいつも一番乗りですよ」

背の高く精悍な顔つきのピッチャーハーフマウンドでキャッチャーを相手にピッチングをしている。既に相当投げ込んでいるのか、少し離れたここから見てもまだ春の冷たい空気の中、体から湯気が立ち上っているのがわかる。

(ウルシ・・だ)

ユカはあらためて不思議な緊張感に包まれた、ウルシが目の前にいる、12年後のウルシが目の前に・・・大人になったウルシ・・・

「漆山!お疲れ、取材だぞ」

「はーい、今行きまーす」

(ウルシが走ってくる、24歳のウルシが近付いてくる)

「こんにちは、テレビ瀬戸内の山梨です」

「こんにちは、漆山です」

「それから、おい」

「あ、篠宮・・由香です」

ユカはじつとウルシを見つめる、「ユカ!」といつ声と笑顔が帰ってくるのを自分も笑顔で受け止める心の準備はできていた。

「はじめまして、漆山です」

「えつ」

「新人なんです、漆山投手と同い年です、今日は一緒にお話を聞かせてもらいます」

「そうですか、かまいませんよ」

（わからないんだ・・あたしのこと 大人になつたから? つうん違う、あたしは名前も言つた、でもあの反応は・・あたしの事が記憶から消えてる、そつとしか思えない）

ユカは現実にとまどいながらも冷静に、冷静にと自分の気持ちを鎮めようと努めた、ロクと同じようにウルシの記憶にはユカの姿はなかつた。

19 記憶

(田の前にウルシがいる。24歳のウルシ、大人になつたけど笑い顔は全然変わつてないよ。でも、どうしてあたしがわからないの? 4日前まで話してたじやない、一緒に泣いたり笑つたりしてたじやない、口クちゃんを助けるんでしょ? ウルシだけが口クちゃんに会えるかもしぬないの、お願い、あたしに気づいて)

「どうもありがとうございました、もつすぐ開幕です、頑張つてください」

「篠宮君、質問あれば、せつかくだから」

ウルシがユカの方に顔を向ける。目が合い、ユカはびざまぎとして、思わず下を向いてしまう。

「新人なんです、質問させてあげて下さい」

「ええ、どうぞ」

「はい、ええと・・・あつ、もしよければロッカールームを見せてもらえませんか?」

「ロッカーを?」

「ええ、あたしも野球が好きで、前に雑誌で見たスター選手のロッカールームがとてもかつこよく見えたので」

ユカのいきなりの願いに初めは少し戸惑つたウルシだったが、わずかの間をおいて笑顔で答えた。

「いいですよ、ちょっと散らかつてるけど」

「ありがとうございます」

ユカは自分の言葉に驚いていた、緊張のあまり質問など思い浮かばず、何も考えずにとっさに出た言葉であった。

ウルシの背中を見ながら廊下を歩く、その背中は《4日前》と比べると格段と大きく、そして広かつた。

「さあ、どうぞ、ここが僕らのロッカールームです、普段は女性が入ることはないんだけど、まだ誰も来てないからどうぞゆっくりご覧ください」

ウルシは手を広げて笑顔でユカを招き入れるポーズをとった。畳2畳くらいの広さはあるだろつか、個人用のベンチに白いロッカー、小物を置く棚もある。棚には高校のチームメートらしき写真スタンドやファンからのプレゼントか小さなクマのぬいぐるみがマスコットのように置かれている。

「思つたより広いですね」

「うん、このスタジアムは見ての通りとてもきれいで設備も大満足です」

ようやく落ち着いてきたユカは冷静さを取り戻しつつあった。

(よし、運よくロッカールームにまで入れたんだから、何かヒントの一つももつて帰らなくちゃ、チャンスのしつぽ・・チャンスのしつぽ・・・)

「ここをバックに一緒に写真を撮らせてもらつてもいいですか」「もちろん、篠宮さんは新人ということだし、オレと同級生ですよね、篠宮さんが人気女子アナになつたらお宝になるかも知れないな」「ふふつ、ウルシらしい・・」ユカは小声でくすつと笑つた。

「えっ、ウルシはオレの小っちゃい頃からの呼び名なんだ、なんだか懐かしいや」

「橋本さんお願いできますか」

「おお、任せとけ、最高のツーショットにしてやるよ

「お願いします」

「はい、チーズ！」

シャッター音とともに空中には撮影された映像が立体的に浮かび上がった。

（おっ、すじつ、最新兵器）

そこにほりょっと驚いて間の抜けた顔をしたユカと優しそうにウルシが立っていた。

「今日は本当にありがとうございました」

橋本が深くお辞儀をしながらウルシに握手を求めた。ウルシはその手を固く握り返すそばでこんなことを口にした。

「ひかりや、じゃ、開幕は今週の土曜だからぜひ見に来て下さって
えつ、ぱりしちゃつていいんですか」

「絶対に開幕で投げますよ、オレの心意気」

スタジアムをしてユカは考へた、ウルシはロクちゃんと対談をしたことがある。ウルシなら昨日のあたしたちと違つてロクちゃんに会えるはず。でも、それにはウルシの記憶が戻らないと・・・。

「なかなか新鮮だったよ

「何ですか？」

「ありふれた質問をするのかと思つたら、ロッカールームを見せて

ほしいなんて、篠宮君度胸あるじゃない」

「いえ、何かの手がかりになるかと思つて」「手がかり？」

「あつ、いえいえ、選手と親しくなる方法つて」とです

「あつそういうこと、今日はどうだつた」

「はい、勉強になりました、これから帰つたらテストです。入社初心を書くレポートもあるので今日の事を書きます」

「そりゃいい、頑張つて」

グラウンドに出たユカは取材の後間もないウルシがもうトラックの横でキヤッチボールの用意をしているのを見つけた、まだ冷たい午前のきりつとした空氣とやわらかな春の光がユカの気持ちを引き締めた。

(またすぐに来るからね、ウルシ)

局に帰り、基本事項のテスト、初心をつづるレポート、局内のある場所の確認。主要な先輩方への挨拶。とにかく密度の濃い午後を過ごしたユカが自宅に着いたのは、9時過ぎだった。

「ただいま、ハハ。あー疲れた」

「お帰り、ユカ、お風呂沸いてるわよ、すぐに入つたら」

「ありがと、きっと体とろける気がする」

疲れ切つた体を脱衣所へと運ぶ。すぐにでも湯船に飛び込みお湯の中に身を沈めたい。

「ほんと、疲れた、あつ、ネックレス、取る」

ネックレスを外し、ポーチの中へ入れる。温かいお湯に体が本当によりけそうだ。

「あー気持ちよかつた、ハハ、夕飯は」

「おじいちゃんとお母さんはもう食べたからそこでグラタン食べて、お父さんは遅いし、ハルは今日友達のところに泊るって」

「わかったー」

「あーおなか空いた、あつ、そつだ、明日の予定を見ておかなくちや」

「うん? > 4月4日 22時 がらくた館 < これ・・・何だろ」

「今、グラタンあつためるから」

「ねえ、ハハ、今日の予定に22時にがらくた館つて書いてあるん

だけど、何かな」

「お母さんがあなたの予定を知るわけないでしょ、それに22時つてもう過ぎてるわよ」

「気になるから行つてくる、グラタン帰つてきてから自分でやる」

ユカはジャージの上に黄色いカーディガンを羽織り、財布の入ったポーチだけを持つて庭を駆け抜けた。格子戸を開き立ち止まる。

右手には山の中腹にあるロープウェイ乗り場、夜景を見る観光客のために最終は22時の下りとなつていて、「がらくた館」もこの最後のお客さんを迎えるかのように閉店は23時になつていて、この町にしてはかなり遅い時間だ。

カラカラカラ

「ゆや、こんばんはユカちゃん・・奥でお友達がお待ちだよ」

「お友達?」

「ユカ、待つたわよ」

「あなた・・誰ですか?」

「誰つて、何、ふざけてるの」

「いえ、お会いしたことないですよね」

「えつ、どうこうこと?」

しーちゃんとユカの会話を聞いていた教授が何かを察したように
しーちゃんの顔を見つめた、そしておもむろにユカに向かって話して
かけた。

「どうやらふざけているわけじゃないようだ、篠宮由香さん、ちょっと座つてもらえますか」

「いいんですけど・・・」

「ちょっとだけ時間をくれませんか、怪しいものじゃありませんか
ら」

「・・・」

「志水さん、僕と篠宮さんをよく見て! 昨日と何か違うことはない
?」

「えつ、どうこう」と?」

「篠宮さんの記憶から僕たちが消えてる、そう判断した、口クヤウルシと同じなんだ。でも昨日は、記憶があつたし今の僕も記憶がある、だから・・僕と篠宮さんに何か違いがあるはずなんだ」「わ、わかったわ、ユカ」めんね、じっくり顔を見せて

しーちゃんは一人を見比べ、上から下へとなめるように見ていく
ユカはあんまりじつくと見られて照れたような素振をした。

「ちょっと、そんなに近くで・・恥ずかしいです」

「あつー。」

20 発見

「何かわかつたのかい？」

教授がしーちゃんを見つめて言った。

「ネックレス！」

「教授は・・・して、私も」

「ユカは・・外して、るわ」

「それだつ！」

「何となく気になつて僕もずっと外さずにいたんだ、寝る時も、風呂に入る時も」

「私もよ、外すのが何だか怖くて」

「ちょっと、一体何の話ですか」

二人の話を聞いていたユカがいぶかしげに尋ねた。

「『めんなさい、そのポーチちょっと貸して』

しーちゃんはユカのポーチをながば強引にとりあげた。

「あつ何するの」

「あつた！」

「お願い、何も言わずにこれをつけさせてみて」

しーちゃんがポーチから取り出したネックレスをユカの目の前に突き付けた。

「えつ？どういうこと？勝手に人のもの取つて」

「それは謝るわ、だからお願ひ、ネックレスを・・つけてみて」

ユカは渋々ながらもネックレスを手に取る、手にした瞬間指先がピクッと震えたような気がした。ゆっくりと首に持っていく、前からチヨーンを回し、くび筋で留めた・・・瞬間！

ユカの頭の中はぐるぐると回転するかのように記憶が渦巻き駆け巡る。あまりの激しさにショックで頭がゆれたような錯覚に陥った。

「あたし・・」

「私の事わかる？ユカ」

「しーちゃん」

「ユカ！」

「記憶が戻つた」

「教授」

「からくりがわかつた、僕らを未来に連れてきたこのネックレス、こいつが鍵だつたんだ」

「どういうこと？」

「推理するに、このネックレスを触った者はネックレスをしている時に限つてお互いの過去の記憶をキープできる、そして外した瞬間に現在も含めてそれを失うんだ、関わった周りの人の記憶からも消えるのかもしねりない」

「篠宮さん、ネックレスを外したのはいつ？」

「確か、今日家に帰つてお風呂に入る時」

「そこで記憶が消えた」

「どうしてここに？」

「手帳を見たらメモがあつたの」

「志水さん、お手柄だ、メモを取つてなければ篠宮さんはここに来てないんだよ」

「なるほどね」

「ネックレスを外したピンチをメモが救つてくれたんだ、それどころかネックレスのからくりまで教えてくれた」

「怪我の功名と言つたところかしらね」

「あたし、役にたつた?」

ユカが何だか訳が分からぬ様子で、それでも少し得意げな顔で一人に問いかけた。

しーちゃんと教授は顔を見合わせてくすつと笑う。そして2人同時に

「もちろん!」

「これではつきりした、口クもウルシもネックレスを外しているはずだ」

「だからマスターは覚えていないのね」「どうすればいいの?」

ユカがようやく要領を得て会話に入つていく。

「2人にネックレスをつけさせなければ話も通じない、まして口クを連れ戻すことなんて」

「園田くんに会うのはもう難しいんじゃない? 昨日のことがあるし」「ごめん、あたしが上手くやってればね・・・」

「ねえ、漆山君なら園田くんとコントクトがとれるんじゃない? ほら2人は対談してた、きっと連絡先の交換もしてるわ、会おうといえば警戒されることもないと思うの、どうこの考え方?」

「うん、でもウルシに会うのがまた一苦労だ。あいつもスターだからね」

困った顔をした教授を見ながらユカがおずおずと口にした言葉は・

：

「あの・・実は今日ウルシに会ったの」

「えつ、何だつて！」

「初めての取材に同行したら、取材の相手が」

「漆山君だつた」

「うん、あつこれ、その時の写真、ロッカールームで撮つてもらつたの」

ポーチから取り出した写真にはユカとウルシのツーショット、有さんが局に帰つてきてからすぐにプリントしてくれたものだつた。

「すゞいぞ、チャンスのしつぽがスルスルとこっちに伸びて来てる、なんて偶然なんだ、ここのしつぽ絶対に離さないぞ」

「連絡先はわかる？」

「ううん、何しろ、初対面、だからそこまでは、でも球場に行けば会えるとは思つ」

「よし、入口はそこだ」

「会えたとして、それから」

「ウルシにネックレスをつけさせむ」

「どうやって？第一どこにあるの」

「・・・」

ウルシにあつたという事実に顔を輝かせた教授はしきちゃんの問いかけにまた難しい顔に戻つた。

「漆山君、球場になんか持つてこないんじゃないのかしら、そしたら家にあるのを持つてきてもうつて、それから・・・」

「うーん、ハードル高そう」

「でも、せりなくちや、そのあとロクと連絡を取る、ロクに会つ、

口クにネックレスをつけさせると、先は長い、それを口クが日本を出発する日曜日までにやらなくてはいけないんだ」

「時間がないわ」

「・・・」

タイムリミットは限られている、日曜日までの高いハードルを越えなければ口クの命がどうなるか分からぬのだ、三人はあるためて事の重大さに緊張した。チャンスのしつぽが田の前にある、しかし、つかんだあとにどうすればいいのだ、無理に引き寄せれば切れてしまうかもしない、かといって何もしなければしつぽは手の中からするりと逃げてしまうかもしない。

じーちゃんがじーっと『写真を見ながらつぶやく。

「漆山君、なかなかかっこいいじゃない」

「うん、でも笑うと昔のウルシそのままだつたよ」「この写真いい感じじゃない、とても、初対面、とは思えないわね」

「ウルシはあたしのことわからぬけど、あたしは念えてつれしかつた、緊張したけどね」

「ウルシに会つてネックレスをつけさせるまでの作戦を練るつ、みんな仕事もある、行き当たりばつたりじゅう田間なんてあつという間だ」

「まずはあたしがウルシに会つのが先ね」

「できる?」

「わからない、でも仕事は自分で見つけて自分で覚えろって言われてるの、今日の取材をもつと深くやりたいってお願ひしてみる」

「志水さんの予定は?」

「じーちゃん?どうしたの」

じーちゃんは黙つたまま視線を一点に集めている、視線の先は2

人が写った写真。くいいるように見つめている。

「もう一つチャンスのしつぽを見つけた」

「え？」

「これ見て」

「なになに？さっきの写真じゃない、あたしきれいに映ってる？」

「そうじゃないの、ここを見て」

ユカと教授は身を乗り出して写真を見た。そしてしばらくの沈黙のあと2人同時に大きな声をあげた。

「あつた！」

写真

21 写真

「間違いない！あのネックレスだ」

二人が写真の中に見つけたもの・・それは・・

ロッカーの棚の上に置かれたかわいらしいクマのぬいぐるみ。おそらくファンからの贈り物であろう。大人の顔の大きさぐらいの愛らしいクマはネックレスを提げ、その両手はガーネットのペンダントを大切に持つように胸の下で受け止めていた。

「意外と簡単に見つかったわね」
「ああ、写真がなければ探すだけで1週間が過ぎてたかもしない」
「あたしもチャンスのしつぽを離さなかつたんだ、やつたね」
「ユカ、お手柄よ」
「2人とも素晴らしい！」

教授が手を打つて満面の笑みを浮かべた後すかさずユカに向かつて言い放つた。

「篠宮さん、またまた当たつて碎けろだ、ウルシに何とか会つて、出来ることならどこかに連れ出してほしい、今の僕らの中でウルシに会えるのは篠宮さんだけなんだ」

「わかった、今度はロクちゃんの時みたいにヘマしないから」「でも、入社5日目でしょ、そんなにわがまま言えるの、ちょっと心配」

「せりなかつたらロクちゃんが死んじゃうかもしれないんだから、

あたしがクビになる」とぐらりなんでもない

「ユカ……」

「もし、みんなと離れてもあたしが連れて帰るから」

「よし、念のためメモだ、4月5日火曜日、20時こことスタジアムの中間あたり、みなと公園の噴水広場といふことにしよう」

興奮した時はあつといつ間に過ぎ去り、店は閉店の時間を迎えた。マスターは何も言わずこつものようにこやかな笑顔で3人を送り出した。

「おやすみ、また明日も来てくれるのかな？」

「あしたはちょっとわからないけど……また来ます！」

未来の世界でどぎれそうになつっていた5人の糸が再びつながろうとしていた。時間はない、限られた時間だ、しかし、5人は同じこの世界に住み、それぞれがそれぞれの思いを胸に抱き存在していた。そして記憶はなくしても心のどこかで仲間を呼んでいたのかもしれない、それが偶然の出会いを呼び起こしたのだろうか、とにかく一つはつきりしたことがある。3人はウルシとロクを呼び戻すチャンスのしつぽをつかんだ！

同じJリーグウルシは開幕を5日後に控え、スタジアム近くの合宿所にいた。

「監督、入ります」

「おう、入れ、そこに座れ」

「はい」

「呼ばれたのは何かわかつてゐな

「そのつもりで来ました」

「9日の開幕戦はお前に投げてもらひ」

「ありがとうございます」

「初めての開幕投手だ、チームでたつた1人の名誉だ、思いつきり緊張して行け」

「はい」

「マスコミの取材も来ると思うが本番までは他言無用だ、取材もなるべく少なくするように広報に伝えておく、ほかのピッチャーも同じだ、一応カムフラージュしないとな、開幕はナイターだから調整も必要だ」

「わかりました、この5回間でベストに持つてこきます」

「よし、行け」

「はい！」

夜も更けた大学院の研究室にはまだ明りが灯っている。口クは自宅に帰らずに研究室に泊りこむ日々が続いていた。

「先生、大丈夫ですか、お疲れじや」

「ああ、大丈夫、設計の最終点検とコンペのプレゼンの準備だよ、何しろ日がないからね」

「出発は1日早くなつて10日の夜になりました」

「了解、ありがとうございます、荷造りを手伝ってくれるかい」「もちろんです」

「先生、今回の手ごたえはどうです」

「ああ、グランプリを取ればアジアナンバー1のタワーだ。高さは1000メートルだぞ、こんなに名誉なことはないさ」

「ライバルはどこになりそうですか」

「どこも強敵だよ」

「最終参加は10か国から10社、大学からの参加は僕らだけですね」

「うん、ぼくはビジネスはどうでもいいんだ、お金もそりゃ大事だね」

けど、自分の設計したタワーが世界中の人々に夢を『える、それだけで十分じゃないか』

「ええ、僕もそう思います、先生と一緒に設計に携われて幸せです」

「ありがとう」

「まだかかりそうですか」

「いや、今夜で終わるよ、出発までの5日間は興奮にじっくりと浸つてみるつもりだ」

つかれた体でベッドに横たわりながら、しーちゃんもまたこの何日かのあわただしい日々を振り返っていた。

「明日のスケジュールを見なくちゃ」

「公演の稽古始めだわ」

(園田くんを助ける)

(ステージに立つ)

落ち着いてみて初めてしーちゃんは未来へ来てからの自分のこの先を思いやった。

「私はこれからどうすればいいのかな」

「ううん、までは園田くんの命を救うこと、それから先はそこまで考えればいいわ」

独り言のようひびくやくとこれからまた始まるであらびじょしつコースターのような日々を思い眠りについた。

教授はなかなか眠れずに本を読んでいた。

♪科学を学ぶ者へ・・初めに肝に銘ずることだ。科学そのものが尊いのではない。それはあくまでも道具でしかない。科学は人類の幸

福のためのひとつ道具である、使う人間の心ひとつでどんな科学技術も悪魔にもなれば天使になる。科学の道を追究する者は、常に自分の事ではなく人類すべての事に目を向けなければならない。そして信じることだ、たとえ千回の実験で真理が見つかからなくとも、千一回目にそれは見つかるかもしれない、そのことを信じ続けることができる者だけが科学を追究する資格を持つのである。

(信じることが・・・)

(信じられないことばかり続いたけどな)

(うん、信じよつ、僕らはきっと口クを助けることができる)

記憶を取り戻したユカは自宅の居間でおじいちゃんの愛用のロッキングチェアにもたれながら。

「おじいちゃん

「おお、ユカかい、どうした

「あたしのこと見てびう思つ

「どうつて、大人になつたのう

「大人・・ほんと?」

「ずつと子供のままでもいいんじやけどな

「ね、あたしのいいところつて何かな

「ユカは小さい時から真っ直ぐな子じやつた、ドジでかわいいイノ

シシじや

「えつイノシシ?・・うん悪くないな

「何か心配ごとでもあるんか

「ううん、大丈夫、ありがと」

「何があればじこちゃんが応援するからな、こいつ見えても書道2段

じや

「書道じやちよつと頼りないよ、あたし明日イノシシでいくよ、頑張つてみる

「どうかお願ひします！」

「うーん、今日は予定では久保木さんについて丸一日放送の現場を覚えてもらつつもりなんだけどなあ」

ユカは翌日ウルシの取材を山梨に願い出た。

「昨日、漆山選手にお会いして、どうしてももう一度取材してみたくなつたんです、お願ひします、行かせてください」

「意気込みはいいけど、その日の朝に言われてもなあ・・・社会人なんだから、勝手な行動は許されないわけだ」

山梨は困った様子で諭す様にユカに伝えた。

「申し訳ありません、でも、開幕の前にもう一度お話して1年間を追つてみたい、昨日の取材の後その思いが抑えきれなくなつて」「でも、アポも取れてないし、部長も何て言つか・・・」

小さな沈黙を重みのある声が打ち破つた。

「いいじゃない、行かせてあげなさい」

「あつ 部長」

「いいんですね」

「入社5日目、この子が抜けても今なら何の問題もない、それに自分から仕事を見つけると言つたのは私だしね、それぐらいのやる気がないといい仕事はできないわ、山梨君にこんな度胸あつた?」

「はあ・・・確かに」

「私が許可するから行きなさい、ただし、アポもないし、他のマスコミも彼には注目しているはず、行って空振りは許さないわよ、あ

なたなりに何かを持つて帰つてくること」

峰岸の言葉に思わずユカの声に力が入った。

「はいっ、ありがとうございます」

ユカはこれ以上ないほど深く頭を下げる。と同時に廊下を駆け抜け、まだ冷たい午前の空氣の中に飛び出していく。

スタジアムでは昨日と同じように午前中のまだ人気の少ないグラウンドでウルシがユニフォームに身を包み、ウォーミングアップを始めるところだった。通路からグラウンドに入り込んだその時。

「あ、こりー勝手に入っちゃダメだ、一体どこのマスコットだ」

球団の職員が、それとも警備員か、その声はひどく警戒を含んでいる。背が高い中年の男は厳しい眼でユカに視線を向ける。

「あ、おはよー!」やうにします、テレビ瀬戸内の篠町と言います、漆山投手に取材をしたいんですけど

「約束は?」

「いえ、昨日インタビューをさせていただいてその続きを・・・」

「だめだめ、ちゃんと広報を通してアポイントを取つてもらわないと、漆山はチームにとつても大事な選手だ、アポなしの取材は一切お断りだね」

「昨日のお礼も伝えたくて・・・少しだけでも時間をいただけませんか」

「だめだね、午前の練習の後、テレビと新聞の2つの取材が入つて、開幕前だしあらかじめ約束のあるもの以外の接触は許されない、さつ、帰つた帰つた」

(イノシシ イノシシ ...) ユカは心の中で呟きながら気持ちを

奮い立たせた。

「そこを何とかお願ひできませんか」

「ダメと言つたらダメ、君、あんまりしつこと会社に連絡して抗議するよ」

（落ち着けイノシシ・・ロクちゃんの時と同じじや学習能力ゼロだぞ）

「わかりました、すみません、それじゃ、客席から見守るだけなら・・いいですか」

「個人的な接触をしないと約束できるならな」

「約束します」

グラウンドには三々五々選手が集まり、次第にこぎやかな様相を呈し始めていた。ウルシはウォームアップを終えるとマウンドに上がり、後から来た選手を相手にシートバッティングのピッチャーを務めていた。

ユカはウルシとどうやって会おうかと考えながらもその姿はある想いでながめていた。

（ウルシ、かつこいいよ、あたしあの時未来のウルシに笑つて会えないとつて言つたけど、今のウルシはとっても素敵だよ、でもロクちゃんを助けるためには昔のウルシに戻つてもらわなくちゃいけないの、これからあたしがすること許してね）

時計の針は11時半を指している。

（そりそろ、午前の練習が終わるわ、きっとお昼を食べて取材・・どうしたらいい?）

「よしひ、やるしかない」

ユカは意を決した様子で観客席を飛び出した。向かつた先はロッカールーム、あたりを見渡すとまだ練習が終わる前だからか、選手の姿は見えない。ユカは正面玄関を避け、選手が出入りする裏口の扉へと向かった、そこは、昨日の取材を終えウルシと一緒にロッカーを出てきた場所だつた。

こいつそりと忍びこむと、だれにも見つからないようにロッカールームへと向かう。途中で廊下の奥から職員らしき人が歩いて来るのに気づく。ユカはどしさにトイレの中に身を潜めた。

（あやつ、男子トイレに入るの生まれて初めて）

再び廊下を進むとそこには見覚えのある風景、青い扉を恐る恐るあけるとそこには間違いなく昨日見たロッカールームだつた。

（今なら誰もいない、やらなくちゃいけないことは……）

ユカはウルシのロッカーをあらためて見渡した。そして、視線の先に見つめたものは。

「あつた、熊のぬいぐるみ」

ロッカーの棚の上には写真で見たぬいぐるみが首からネックレスを提げ、両手で大事そうにガーネットのペンダントを抱えていた。ユカはそつと近づくと、ぬいぐるみが手にしているネックレスを慎重に首から外し、片手の中で握りしめた。

ネックレスを握った手でぬいぐるみを胸に抱きしめた後、元の場所に戻しユカはぬいぐるみに向かつて小さくつぶやいた。

「「Jめんね」

（Jれを何とかしてウルシにつけさせればいいんだ、つかんだよ、チャンスのしつぽ。絶対に離すもんですか）

ユカは少し顔を上気させながらもう一度ネットレスを力強く握りしめる。棚の上のぬいぐるみの田がユカを見つめるように顔を向けていた。

奇妙な再会

23 奇妙な再会

(どうしよう…ここにいてもウルシに驚かれるだけだし、2人きりで話もできない、追い出されるのがオチだし…)

ロッカールームに忍び込み、何とかネックレスを手にするまではできた、しかし、そのあとどうすればいいのかがユカにはわからぬ。考えていた間に練習が終わり選手たちが一斉にロッカーに帰ってくるのだ。そうなつたら万事休す、チャンスのしつぽはする」と手から逃げていくかもしれない、ユカはあせつた。

(どうする？落ち着いて、あたし…・・そうだ)

ユカがバッグの中から取り出したのはエメラルドレモン、お守り代わりに常に一つ忍ばせていたものだった。ユカはじつと見つめた後思い切りレモンをかじる、果汁のしぶきが微かに顔のあたりに吹き出し、レモンの香りが鼻先でくすぐったく香る。

「あやつ、すっぱーい！」

顔を思いつきりしかめた後、ユカは何か吹つけられたようにもう一度かじりかけのエメラルドレモンを見つめた。

「持つてると幸運が訪れる」

(リムーのおじさん！)

「魔法の薬だよ」

(マスター！)

2人の声が聞こえたような気がした。

「よし、いちかばちかだわ」

ユカはロッカールームを抜けだすとついさつき逃げ込んだ男子トイレに再び入る。そして、今度は個室へ身を忍ばせた。胸の鼓動は高鳴り心臓が今にも飛び出しそうだった。

（男子トイレに隠れてるあたしつて・・・）

5分も経ったころ、静かだつた廊下がにわかにさわがしくなった。トイレの前を通り過ぎる力チャカチャというスパイクの音、それに混じつて男同士の笑い声や話し声、バットで廊下をつつく音だらうか時折コン、コンという乾いた音も聞こえてくる。

（練習が終わつたんだ）

ユカはじつと息を潜めて待つ。その時、トイレのドアが開く音がした。だれかが入ってきたのがわかつた、声は聞こえない、1人だ。ユカはそつと、個室のドアを開けるとわずかな隙間から用を足している男の背中を見た。

（背番号・・22 ウルシじじゃない・・）

ユカはそつと扉を閉めるとふたたび息を潜めて待つ。

（神様お願い、ウルシに会わせて！それも2人きりで！）

次の選手もその次の選手もユカの目指す背番号をつけてはいなか

つた。ウルシでないことを確認しては扉を閉めるたびにユカの心臓は忍びこんだときの何倍もの激しさで鼓動した。

4人目はなかなかやつてこなかつた、ユカは祈りながら待つはない。ロッカーで選手が落ち着いたのかしばらくの時間の後、トイレのドアが4たび開く音がした。ユカは前の3人の時と同じように、慎重に個室の扉をあれ目の前のコニーフォームの背番号を見た。

(背番号14 ウ、ウルシだ！)
(チャンスのしつぽ！つかめ！)

ユカはウルシが用を足し終えて振り向こうとした瞬間、意を決して扉を開いた。

「うわあ！」
「漆山くん！」
「き、君は、確か昨日の・・・」
「ウルシ！」

ユカは半分目をつぶりながらウルシの厚い胸に向かつてまるで体をぶつけるように飛び込んだ。

「な、何するんだい
「戻つて！お願い！」

ユカは抱きつづく間にウルシの首に手をかけるとネックレスを巻きつけ金具を留めた。ほんの2、3秒の出来事がユカには何分もの長さに感じられた。一瞬ウルシの目がかつと開いた気がした。眼を開いたユカの10センチもないくらい目の前にウルシの顔があつた。2人の目と目が合う、大きく見開いた瞳の中にお互いの顔が映し

出された。

「ユカ?」

「ウルシ、も・もじつた・・?」

「あ、ああ・・」

「きやつ」

あまりの顔の近さにユカは顔を赤らめて思わず後ろへ飛び退いた。

「！」、「めん」

「何でここに?」

その時トイレの外の廊下をカツツカツツというスパイクの音が近付いてくる。ユカはウルシの手をつかむと個室の中に押し込んだ。ドアの開く音、2人は息をひそめ緊張した顔でお互いに顔を見合わせる。わずか1分ほどの時間が流れるのがとても長く感じる。手洗いの水の音が途切れた。ドアが開き、そして閉じると再びトイレの中に静寂がよみがえった。

「すごい再会だな」

「映画みたいでしょ」

「映画か・・ハハツ」

「ハヘツ」

2人は互いの顔を見つめながら思わず声を出して笑った。狭い個室の中に笑い声が響く。

「話していい?」

「いいけど、こんなとこ誰かに見られたら大変だぞ、お前、度胸あるな」

「うん、あたし、イノシシだから」

「うして」一人の奇妙な再会は果たされた。コカは口の中に残るエメラルドレモンの酸っぱさに感謝した。一度は逃げかけた「チャンスのしつぽ」は今一度コカの手にしつかりと握られたのだ。

乾いた冷たい空気が男子トイレの中に張りつめる、コカはわずか30センチ先にあるウルシの皿を見つめて物語を聞かせるかのようにゆっくりと話し始めた。

24 作戦

ユカとウルシは男子トイレの狭い個室の中のわずかなスペースに座り込み顔を合わせた。一人の距離はわずかに30センチばかりだろうが、ユカは妙な照れくささを感じながらもとにかくウルシに伝えねばならぬことがあった。

「前置きはナシね、ロクちゃんが命を狙われる日がわかつたの、来週の月曜日、4月11日。前の日に飛行機で日本を出発するから、それまでにロクちゃんに会って、連れ戻さなくちゃいけないの」「えっ、今週中？」

「そう、あたしたち、ロクちゃんのところに行つて会おうとしたのでも、あたしたちの記憶がなくなつて会えなかつた、このあとも会うのは難しい」

ウルシは取り戻した記憶をさらに手繰り寄せるように頭の中を整理しようと努めた、一度によみがえつてくる様々な記憶がウルシの頭の中を渦巻いていた。

「記憶・・・」

「ネックレスよ、ウルシも今あたしがネックレスをつけたからあたしがわかつたのよ」「このネックレスが・・・」

ウルシはクビに提げたネックレスを手に取つてじっと見つめる。

「そうなの、あたしも一度外した、もちろんその間のみんなの記憶

はない。運よくしーちゃんと教授に会えて戻ったの、そして初めて分かつたの、このネックレスをつけていたことであたしたちの未来での記憶がキープできるってこと」

「そうか、それで？」

「ウルシ、前にロクちゃんと対談してるわ、お互いの事をわからずにな、2人とも地元のホーブだから」

「おお、思い出した、確か正月の・・雑誌の取材だよ」

「だから、ウルシが会おうと言つてくれれば、ロクちゃんに会える、ううん、ウルシじやなけりやだめなの」

「しーっ・・誰か来る」

沈黙を打ち破るかのように、ドアが開き何人かの男たちの話し声が聞こえてくる。

「お疲れ」

「おお、開幕投手、聞いたか？」

「漆山だろ」

「ああ、あいつならやつてくれるだろ」

「今年は優勝のチャンスだからな」

「一度くらい味わつてみたいもんだぜ」

手洗いの音、ドアが閉まり、静寂が再び冷たい空気を際立たせる。ユカはウルシの顔がピクっと動くのを見た。

「ウルシ、投げるんだ」

「ああ、土曜日の夜が開幕だ」

「ロクちゃん・・」

「わかつた、任せろ、でどうすればいい？」

「今夜しーちゃんと教授に会う、来られる？」

「夜なら大丈夫だ」

「ここに場所と時間が書いてあるから必ず来て、それから、絶対にネックレス外しちゃダメだよ」「了解」

ウルシはちよつと笑つたあとコカの頭を軽く2度たたいてみせた。

「じゃ、ここから脱出だ、おれが先に出て合図するからだれにも見つからずにすぐにここから外に出ろよ、新人の女子アナが男子トイレから出てきたなんて見つかったらほんと大変だぞ」

「うん、了解」

「よし、行くぞ」

「あつウルシ」

「何だよ」

「ありがと、思い出してくれて嬉しかった」

「何言つてんだよ」

星空、あたり一面の星空だった。みなと公園は水島港を見渡せる高台にある。花時計と噴水がある以外は何もない、海と町と島を静かにゆっくりと眺める、それだけのために造られた公園だ。夜になればわずかな街灯以外に光はない。

「ようやく4人そろいましたね」

「ウルシが来てくれて心強いわ、コカ、頑張ったわね」

「おお、トイレでの再会だぜ、みんなに見せてやりたかったよ」

「何言つてんの、必死だつたんだからね」

「で、口クと連絡は取れそうかい」

「もう、連絡したよ」

「えつ早！打ち合わせもしてないのに」

「だって、日もないんだろ、善は急げだ」

「漆山君らしいわね、それでどうなったの」

「ああ、明日の夜だ、もちろんオレも毎晩は練習でどうでもならないからな」

「えつ、約束までしたのか」

「おお、出発前の準備があるから研究室に来てくれるならってな」

「研究室・・ウルシ、それは素晴らしい」

「何で?」

「これだ!」

3人は花時計の前で街頭に照らし出された教授の手のひらを覗き込んだ。教授はカバンからおもむろにあるものを取り出してみんなに見せた。それは何枚もの写真の入った小さなアルバムである。

「口クの研究室の写真だよ」

「ええつ、どうやって撮ったの?」

「昨日、みんなが帰った後さ」

「し、忍びこんだってこと?」

ユ力か由を丸くしてすつとんきょうな声を上げた。

「うそ、教授泥棒までやるの」

「泥棒とは穩やかじやないね、せつかく行つたのに手ぶらで帰れるもんか、首相官邸つてわけじゃないし警備も緩やかだつたよ」

「すごいわね、教授」

「それで素晴らしいって、何が素晴らしいの」

「これを見てくれ」

教授は30枚以上はある写真の中からある一枚を取り出して街灯のうす明かりに照らして見せた。

「あつ、これ!」「ネックレスだ!」

三人が一斉に大きな声を上げた。

「うん、引き出しを開けて片つ端から写真を撮ったんだ、昨日ネットレスのことが判つてから、もしかしてと思って調べ直してみたら見つけた。これこそ、最高のチャンスのしつぽだ」

「そつか、口クに会つても記憶が戻らなくちゃ話になんないもんな、無理やり何かしたら下手すりゃ犯罪者だぜ」

「そうなんだ、今日ウルシに会つたら研究室で会うように約束してもらおうと思つてたんだ、その手間が省けたつてわけや」

「おお、さすがにオレだろ」

「単純、ウルシ、ぐーぜん、ぐーぜん」

ユ力の言葉を聞き、四人は久しぶりに声を立てて笑つた。

「作戦を立てましょ」

「約束は明日の夜の8時、オレがまず口クに会つ、隙を見て窓の力ギを開ける」

「教授は泥棒の天才だから」

「ちょっととちょっと・・人聞きの悪い、うん、僕が忍びこんでネットレスを取る、その前にウルシ、何とか口実をつけて口クを部屋から出してくれ」

「わかった、それから?」

「口クの帰つてくるのを静かに待つ」

「なるほど」

「そして隙を見て口クの首にネットレスをつけろ!」

「よし、完璧!」

「絶対に逃がさないぞ! チャンスのしつぽ!」

ようやく四人が揃つた、そして、口クを助ける作戦が立つた。四

人の頭上には満天の星空がエールを送るかのように瞬きを繰り返していた。

思わぬ展開

25 思わぬ展開

ウルシは少し緊張氣味に口クの勤める大学院の警備室の前に立つた。つい数日前、コ力たちが門前払いを受けたあの場所だ。小さく深呼吸をして警備員に声をかけた。

「こんばんは、園田先生と約束をした漆山と言います」

「ああ、野球選手の・・・うかがつてます、今、先生に取り次ぎますから」

「ありがとうございます」

「では、どうぞ」

ウルシはもう1人の警備員に案内されて、口クの研究室の前に立つた。ノック、続いて中から聞き覚えのある声が返ってきた。

「はい、どうぞお入りください」

ウルシはゆっくりドアを開ける、口クは扉に歩み寄りウルシを出迎えた。

「こんばんは先生、漆山です」

「じぶわたしています、対談の時はありがとうございました、またお会いでできとうれしいです」

「こちらこそ、来週にはまた外国でコンペがあるのです」

「ええ、漆山さんも開幕投手決定つてもっぱらの評判ですよ」

「いえ、まだ完全に決まったわけじゃないんですけど」

「またまた、開幕は3日後でしょ、まあ、言つちやいけないんでし

ようね」

窓の外では3人が聞き耳を立てながら部屋の中をうかがっていた。もちろん聞こえるわけもないが、カーテン越しに洩れる明かりが桜の大木をぼんやりと照らしていた。ユカが小声で聞く。

「どう、うまくやつてそう?」

「ちょっとわからないわ」

「あわてずに対とう、口クが部屋を出ないとどうにもならないよ、中には入れればネックレスの入つてた引き出しの場所は覚えてる」

部屋の中ではウルシが口クに話しかけながらも、どうしたら部屋の外に出すことができるか考えていた。

「先生、僕らはお互い水島の代表として、先生は来週には海外に新しくできるタワー設計のコンペに出演されると、僕は今週末に開幕を迎えます。今日来たのはその前にお会いしてもう一度先生とヒルの交換をしたいと思つたからなんです」

「そうですか、嬉しいですね、わざわざ夜遅く来ていただいてありがとうございます。長い時間はとれませんけどお話ししますよ」
(何とか口クを部屋から出すには……)

「先生、すみませんがちょっとのどが渇いてるんでお茶を一杯もらえませんか」

「ああ、すみません、気がつかなくて、今、助手に持つてきてもらいましょう」

(失敗だ……)

「ありがとうござります、あ、そうだ、ここへ来る途中見事な月が出てたんですね、ここは町から離れてるせいかもちゃくちゃきれいだったんですよ、ちょっと見て下さい、悪いけど窓を開けますよ」

ウルシは窓際に歩くとカーテンを開け、おもむろに窓を開ける。

窓の下にいる3人に隠れるよつ田配せをした。

(えつ いきなり?)

3人は明かりの届かない木の陰に身を寄せ息をひそめた。

「へえ、実は桜の大木があつてちょうど満開なんです、どれどれ」「ほんとだ、こりや最高だ、ほら月明かりに満開の桜」

「見事な用ですね」

「いやーいい、僕らの出発を祝つてくれてるみたいじゃないですか」「そうだ、漆山さん、お茶といったけどじょっと乾杯しましちゃう、お酒は大丈夫ですか」

「いいですね」

「いいワインがあるんです、離れた部屋にあるので持つてきましょう、しばらく待つてもらえますか」

「もちろん」

口クが部屋から出るのを見届けるとウルシは窓の外に向かって小さく叫んだ。

「今だ、教授、入れ

「OK」

ウルシは教授の手を引つ張りあげると部屋の中に引きづり込んだ。

「オレは見張つてる、早くネックレスを!」

「わかった」

「急げよ、見つけたらテーブルの下に隠れるんだ」

「うん」

教授は写真と自分の記憶を頼りに引き出しを物色した。ところが

おかしい、あるはずのネックレスが見つからない。

「どうした、まだか？」

「いや、無いんだ、間違いないこの引き出しなんだけど」「えっ？ 記憶違いじゃないのか」

「いや、ここだ」

「まあいい、口クが帰ってきた、ひとまず隠れろ」

教授はあわててテーブルの下に身を隠した。

「お待たせ」

「あ、いえ、すみませんね・・」

「これがとつておきのワインです」

「あ、ありがとうございます」

「何だか顔色が悪いですよ」

二人は動搖した、このままでは作戦は失敗に終わる、最初で最後のチャンスかもしれないのだ、ようやくつかんだチャンスのしつぽを逃してはならないという気持ちが一人をさらにあわてさせた。その時である、あせりを隠せぬ2人の耳に思わず言葉が飛び込んできた。

「探し物は見つかったかい、ウルシ？」

「えっ？」

「教授もいるんだろ」

「口、口ク・・・」

「みんなもいるなら入っておこでよ」

口クは開け放たれたままの窓に向かってそう呼びかけた、まるで全てが分かっているかのようだ。

(「どうして?」)

ユカとしーちゃんはお互に顔を見合させた、一体何が起こっているのかがわからないままに2人は窓を乗り越えて研究室に体を潜り込ませた。

静かな研究室の部屋の中に5人がそろつた。それは意外な形での再会であったが、まぎれもなく5人がこの未来で顔を合させたのだ。4人は口クを囲るようにして立つた、ユカが素朴な疑問をストレートに口クにぶつける。

「口クちゃん、どうして? あたしたちのことわかつてたの?」

「うん」

「どうして?」

「偶然だよ、来週の渡航のお守り代わりに」と思つてこのネックレスをたまたま付けたんだ、その瞬間全ての記憶がよみがえった。おどといの深夜のことだ」

「じゃ、昨日のオレの電話は」

「もちろんわかつてたよ」

「じゃ何でこんな・・・」

「昨日ウルシから電話が合つた瞬間、直感したんだ、特に理由はないんだけど、ウルシも僕と同じように記憶が戻つてるって」

「それで?」

「これも理由はないんだけど、ウルシが突然会いたいと言つてきた、どんなことは分からぬけど、僕を過去へ連れ戻しに来る、そんな予感がしたんだ、ちがう?」

「そうだ」

「ぼくは、逆にみんなを待つていた、知らないふりをしたのはちょっと様子を見てみようと思つただけさ」

「待つっていたつて?」

「みんなを説得するためだよ」

口クは真剣なまなざしで4人を見つめた。

再びの決断

26 再びの決断

「どうじゅうとなの園田くん」

口クは4人に向かいぬつくつと語りかけた。

「みんなも結局ネックレスを使って未来へ来た、それぞれが夢を実現してるはずだよね、ぼくは未来の自分、そう今の自分に満足して、あの時言つたよね、ぼくが夢を実現させるにはこれしかないんだって、だから、ぼくは過去へ戻るつもりはない、ネックレスの仕組みが分かった今、今日みんなと別れたら2度と手にしないようにするつもりさ、だからぼくを連れ戻そうっていうのはあきらめてくれ」

その言葉を聞いてあわててウルシが口クに言ひ寄つた。

「待て、口ク、話を聞いてほしいんだ！」

「ぼくのほうこそ話を聞いてほしい、みんな、冷静に考えてほしいんだよ、今の自分、未来の自分はどうなの？志水さんはミコージカルをやつてるんでしょ、ウルシはまもなく野球界のスーパースターだ、帰る必要があるの？ぼくらは誰ひとり悲しませていないんだよ」「口クちゃん、待つて、違うの…」

「何が違うんだい

「あたしたち口クちゃんを助けに来たの」

「助けに？」

「口クちゃんがいなくなつた後に未来の新聞が残つていて、そこに記事が出てたの、口クちゃんが外国で狙撃されるつて

「えつ」

「そ、うなんだよ、口ク、記事では来週の月曜日に撃たれると書いてあつた」

口クはしづらく考えたのちに問いかけた。

「そう・・で、ぼくは死ぬの？」

「わからない、そこまでは書いてなかつた」

「撃たれる・・」

「あたしたちみんながここに来たのは口クちゃんを助けるためなの、お願ひ、それだけはわかつて！」

ユカは必死になつて話した。口クの夢を奪いに来たのじゃない、それだけはどうしても口クに伝えたかった。

「・・・わかつた、ありがとう。それは本当の事だろ？、これだけ信じられないことを体験したんだから僕でもわかる」「わかつて・・くれて・・ありがと」

「なら・・、みんなでここに残らないか、ぼくは出張をやめる、ぼくの命を救いに来てくれたみんなには心から感謝する。命の恩人だ。それならみんなが今の夢を手にしたままで、また、一緒に過ごしたいい、それができるならこんなにいいことはないと思わないか？」

未来に残る・・

4人の頭の中に新しい混乱が生じた。今までは口クを助けること、そのためには口クを過去へ連れ戻すこと、それだけしか頭の中になかつた、しかし、口クの命を救いさらに全員で未来へ残るという新たな選択肢が突然目の前に現れたのだ。気付かなかつた。しかもここでは全員が自分の夢を手に入れているのだ。

「ウルシ、君は今週末に開幕投手としてマウンドに立つんだが、それを捨てていいのかい」

「そ、それは・・・」

「みんなもここで新しい人生がスタートしてはすだよね、ここに残ることの何が悪いの?」

ウルシは自分が真新しいマウンドの上に立っている姿を、しーちゃんは舞台の上で声を高らかに歌つている自分を、教授は大勢の前で論文を発表している場面を思い描いた。

それはそれぞれが夢に思い描いていた姿だった、そして、この世界では夢ではなく紛れもない現実なのだ。

(未来に残る・・・)

ユカもまた迷っていた。わずか5日間の未来の日々、たった5日間の中だけなのにもう何年もいるような気がする、入社式、テレビ局の人たちとの出会い、初めての取材、わずかに触れた大人の世界は考えただけでも魅力あふれるものだった。

(峰岸部長さん、久本次長、山梨先輩・・・)
(たくさん新しい出会い・・・)

でも・・何かが足りない気がする、何かが・・あたしはいきなり見晴らしのいい頂上に来てしまったんだ。途中の景色を見ることなく。

「みんな、どうあるの?」

「・・・」

「あたしは、何か違う気がする、確かに夢は手にしてるけど何か違う気がするの・・・」

「夢は人から与えられるものじゃないってこと?」

「それもあるけど、何かが・・わからない」

「・・・」

しばらくの沈黙の後、口を開いたのはやっぱり教授だった。

「僕らは仲間だ、でもそれぞれが別の人間もある。そして僕らはここではもう大人だ。みんな自分の人生をそれぞれ別々に歩いていくんだ、ならば、僕らは仲間だけれど、その決断はそれぞれが自分でするしかないんじゃないか」

「自分で・・」

「そうだ、自分自身で考えに考え抜いて結論を出す、その結果僕らはバラバラになるかもしれない、それぞれの記憶さえも失うことになるかもしれない、でも自分の決断に責任を持つのも自分自身じゃないか」

「人生に責任・・」

(教授の言葉はどうしてもこんなにあたしたちの心につきわざるの、人生なんて、あたしの頭にはない言葉・・)

ユカは自分がまだ子供なんだと痛感していた。

その次に口を開いたのはしーちゃんだった。

「ねえ、みんな、こいつこいつこいしない、土曜日までそれぞれ自分が考えるの、悩んで悩んで悩みぬくの、そして自分で結論を出す、帰ると決めたならここに戻つてくる、園田くん、もし帰らないなら見届けてくれる?」

「わかった」

「漆山君がここに来ないとこついとまアウンズに立つている」と云ふ

なるわ」

「ああ」

「みんな、どう？」

「ユカは？」

「・・・うん」

ユカが小さくうなづくと、4人も同じように小さくうなづいた。そして、ユカは迷った末に仲間たちに「うつ告げた。

「あたし・・・みんなにひとつお願いがあるの」

「何？」

「あたし、金曜日の夜に初めてテレビに出る。まだ、入社して1週間、インタビューのアシスタントだから、横に座てる程度だけど、でも、あたしにとつてはとっても大きな仕事・・・みんな、あたしがこの未来でアナウンサーとしてやっていけるか見てくれない？」

ユカは真剣なまなざしで、しーちゃんを、ウルシを、教授を、そしてロクを順番に見つめた。

「いいけど」

「うん」

ウルシと教授が顔を見合わせて答える。しかし、ユカの真意がわからずに戸惑っているようにも見えた。

「でも、ユカ、どういう意味なのか教えて」

「あたし、自信がないの、夢を手渡されてもそれを大事に育てていけるのかって・・・」

「・・・」

「まだ心は大人になりきれてない、だから、みんなの目で見てほし

い、ダメならば、ダメってはつきり言ってほしい、わたしたち、ここまでケーブルカーであつていう間に連れて来てもらつたようなものよね、自分の足で登ってきたわけじゃない。だから、わたしに力が無ければもう一度最初から山道を登るつもり」

しーちゃんはコクリとうなずくとユカの目を見つめ言った。

「わかったわ」

永遠の別れとなる可能性を秘めた満月の夜は静かにそしてゆつくりと更けていった。

「危ない！」

まぶしい朝の光の中、駅を目指して駆けるユカの左から1台のトラックが猛スピードで近づいてくる。男はユカの左腕をつかみ、半ば強引に自分の方へユカを体ごと引っ張った。

目の前を間一髪トラックは走り去る。

男の一瞬の判断がなければ、事故はまぬかれなかつたろう。

「大丈夫かい？」

「す、すみません」

「それにしてもひどいなあ、こんな狭い路地をあんなスピードで走るなんて」

「あ、ありがとうございます、本当に助かりました」

「ちょっと乱暴に引っ張っちゃってごめんね」

「とんでもない、引っ張つてもらわなければ完全にはねられてました、ありがとうございます」

「とにかく良かつた、急いでたの？それとも、何か考え方でもしてたんだろう、気をつけなくちゃ」

男は上下濃紺のジャージ姿、年齢は20代だろうか、ランニングキャップの下に温かい笑顔があつた。

「ジヨギングですか？」

「うん、トレーニングかな」

「これからは気をつけます」

「正解だ、じゃ」

男は走り去る、そのあとにカチヤカチヤといつかすかな音がユカの耳に残つた。

（いけない、いけない、でもあの人気が助けてくれなかつたら・・・あつ、名前ぐらい聞くんだつた、命の恩人なのに）

4人が別れてから2日が過ぎた。男の言う通りユカの頭の中は周りの事に気が向かないぐらい乱れていた。未来へとどまる、過去へ戻る、選択肢は2つに1つ。

めまぐるしく通り過ぎたわずか10日あまりの日々、このわずか10日ばかりの短い時間の中だけでも、何回か大きな決断を迫られることがあった。そのたびにユカも自分の心に正直に道を選んできたつもりだった。

しかし、今回の決断は今までのどれよりも大きく、そしてその意味は重い。

自分の人生を自分で選ぶ最後の決断なのだ。そして、だれにも相談することはできない、それはユカだけでなく、4人の仲間すべてにあてはまることだ。教授の言った一言がいつまでもユカの心の中にこだまのように繰り返しよみがえる。

「自分の人生は自分で責任を持たなくちゃいけない」

自分の人生・・・

ユカはその言葉を心中で何度も唱えた。

「おはよう、篠宮君」

「あ、久本さん、おはようございます」

「見てると、この2日ばかりなんだか元気がないんじゃないかな、さすがに疲れたか」

「いえ、大丈夫です」

「初日2日目は緊張して疲れも忘れるからな、少しだけ慣れてくる1週間目あたりにぐつと疲れが出るんだ」

「ほんとに大丈夫です」

「新人は最初の半年は土日が休みだ、今日を乗り切れば一息つけるからな、気合を入れてけよ」

「はい！」

「今日の仕事はわかつてゐるな、アシスタントとはいってテレビの画面に出るんだぞ、しつかり打ち合わせをしておけよ」

「わかりました、あの、原田さんは」

「おお、もうスタジオ入りしてる」

原田はスタジオの隅にある打ち合わせと休憩を兼ねたブースで台本を目で追っていた。

「原田さん、おはよ／＼ざいます」
「おはよう、篠宮君、待つてたよ」
「今日はよろしくお願ひします」
「うん、じゃ簡単な打ち合せ」
「今日、インタビューする方つて？」
「地元出身のアスリートたち」
「陸上の選手ですか」
「ま、そんなところだ」

「あの、あたし、まだ、台本すらもらつてないんですけど……」

ユカは両手を上げてジョスチャーを交えながら原田に質問した。

「実は、わざと渡していないんだよ」

「えつ」

「今日の君の仕事は僕のアシスタントだ、最初の自己紹介のあとは僕とゲストの話をじっくり聞いていてくれ」

「聞く・・だけですか？」

「聞き終わったあとで君に話を振る、感じたままの感想を言葉にしてくれればいい、何か質問してもかまわないよ」

「アシスタントというより、視聴者みたい」

原田は少し笑みを浮かべながらユカの顔を見つめ、その次には真剣な表情でユカが口にした疑問に答えた。

「それだ、今日のインタビューでは新人の君の生の感想を聞きたい、それも含めて1つのドキュメントなんだ、本当なら君には全く何も知らせずにやりたかったんだけど、それじゃあ、さすがに君も不安だろうから一応話はしておくけど、あとはぶつつけ本番でいい、あらかじめ台本を読んでいたらそこには驚きも感動もない」

「そんな、無茶ですよ、あたしの感想なんて・・まして初めての出演なのに」

「ま、生放送じゃないから心配しなくていい、放送は夜だ、いざとなれば編集するだけさ」

「はあ」

「自己紹介ぐらいは練習しておけよ、1時間後にAスタジオだ」

ユカはとまどいを隠せぬまま化粧室へと足を運ぶ、鏡の中の自分をじっと見つめたあとそっと目を閉じた。

（とにかく、しっかり話を聞こづ、みんな、あたしのことを見てくれるんだ、恥ずかしくないように仕事しなくちゃ）

ユカは大きく1つ深呼吸をしてスタジオに向かった。

「本番用意して下さい！」

マイクを通して大きな声がスタジオに響き渡った。ライトに照らされた椅子が3つ、1対2という形でセットされている。

「篠富君、記念すべきスタジオデビューだぞ、頑張れ」久本がポンとひとつユカの肩をたたいた。

「はい！」

「ゲストの方入りまーす」

声に押されるようにして一人の20代らしき青年がスタジオの袖から入ってくる。

「こんにちは、茶谷です、はじめまして」

「あっ！」

青年と顔を合わせた瞬間、ユカは思わず声を上げた。

「あっ、君は確か今朝の・・・」

「何、だ、知り合いなのかい」

「いえ、今朝、偶然、あたしがあやうくトラックにはねられそうになつたのを助けて下さつたんですね」

「へえーそりゃまた偶然だ、あ、はじめまして、今日のインタビュアーを務めます原田です」

「はじめまして、よろしくお願ひします、ちょっと緊張してたんですけど何だかリラックスしてきちゃつたな」

「あたし、篠富です」

「茶谷です、あらためてよろしくお願ひします」

茶谷と名乗った青年は一人と握手を交わすと今朝と同じ温かい笑顔をユカに投げかけた。

ユカと原田、そして茶谷の3人はまばゆいばかりの照明の下テーブルを挟んで向かい合って座った。

あとはスタートの合図を待つばかりである。

ユカは胸の鼓動を押さえるようにひとつ大きく深呼吸をして、合図を待つた。

テレビカメラのランプが赤く光るのが見えた。

「それでは本番入りまーす」

「5・4・3・2・1 スタート！」

スタジオが明るくなると軽やかにオープニングテーマがスタジオに流れる、それと同時にテレビカメラがスポットライトに照らし出されたユカと原田を画面の中にとらえた。

「みなさん、こんばんは」
「こんにちわ」

ユカも原田に合わせていかなべくお辞儀をして挨拶を口にした。オープニングテーマの音楽が終わり原田がゲストを紹介した。

「今日は地元期待の ハアスリーート 茶谷雄介さんをお迎えしました」

カメラはすでにゲスト席に座っていた茶谷をクローズアップで映し出す。原田が最初の会話のボールを投げかける。

「今日はどうぞよろしくお願いします」
「いらっしゃりようしあくお願いします」
「茶谷さんは中学の時に陸上を始められたんですね」
「はい、中学1年の時ですね」
「3000mで記録をお持ちと聞きました」
「向いてたんでしょうね、普通このぐらいの中距離が一番苦しいんですけど、でも僕は走っていて楽しくてしょうがなかった」

「（）にメモがあるんですが、岡山県の記録なんですね、いまだに破られない」

（へーす）、「そつなんだ）

台本を渡されていないコカにとつては耳に入ることすべてが初めて知る内容だ。きょとんとした顔をもう一台のテレビカメラがとらえた。2台のカメラのうち1台はコカの素のリアクションを追いかける。

「（）が、中学3年生の時、大変な事故に巻き込まれたんですね」「ええ、交通事故です、トラックにはねられて両足を轢かれる形になりました、ちょうどジジユニアインターハイの直前で試合の事を考えながらぼーっと歩いていたのがいけなかつたんですね」

（えつ？）

「大変なお怪我だつたそうで」

「そうですね、事故直後の痛みは今でも時々夢の中でも思い出します」

「結果として両足を無くされることに・・・」

「はい、今はこんな感じですね」

青年はズボンを片足ずつまくしあげて見せた、そこには機械のような銀色の「脚」が冷たい表情で光を放っていた。

（ぎ、義足・・あつ、あの時の音ー）

コカは今朝、青年が走り去る時に聞いたカチヤカチヤといつかすかな音を思い出した。

「足を失うとわかった時のお気持ちというの」

「それは一言では言い表せないですね、命が助かっただけでも幸せと思つてと言われたこともありますが、そうは思えないんです、一生走れないんだという気持ちで頭の中がいっぱいでもう死んでしまったかった」

「気持ちが立ち直るまでにはどのくらいの時間がかかったんですか」
「半年くらいかかりました、友達が見舞いに来てくれても会いたくないという気持ちで誰とも会わなかつた、いや、会えなかつたとうべきかな」

「その後、気持ちを立て直したきっかけというのは」

「仲間です！陸上部の仲間たちが毎週見舞いに来てくれたんです、今度こそは僕に会えるかもしれないと思って、半年間毎週ですよ、会えないとわかると手紙を託して帰つていきました」

(仲間・・)

「素敵なお友達ですね」

「それでも最初はその手紙さえも読む気になれないんです、自分の無くなつた足を見ては、自分へのみじめさとか走れる仲間たちへのねたみとか、そんなどす黒い気持ちが渦巻いていたんです」

「なるほど、気持ちを開くまでに相当の時間がかかつたわけですね」

「そうですね、毎週会いに来てくれる仲間を追い返し続けたわけですから、今思うと本当にイヤなやつでしたよ」

茶谷はそう言つと人懐っこく笑つて見せた。

「気持ちを切り替えられたのは何かきつかけがあつたんですか？」
「はい、半年過ぎたある日、水島でちょっと大きな地震があつたんですね、けが人も出てニュースでも流れたからかなりの大きさでし

た。僕も驚いてベッドで身を固めていると病室の棚にしまってあった手紙がバサバサとベッドの上に落ちてきたんです」

(地震・・・、茶谷さん見た日は20代後半でところだから、もしかするとあの地震・・・)

「さつしお話されたお友達の手紙ですね」

「僕のベッドの上に何十通もの手紙が散らばりました、それを見た時、これは神様が手紙を読めと言っているのかなって、初めて思つたんですよ」

「何だか不思議な光景ですね、それで?」

「手紙を1通ずつ読んでいったんです、1時間近くかかりました」

「・・・」

「涙が止りませんでした、ここで全ては紹介できないけど、そこには仲間たちの温かい気持ちがあふれんばかり記されていました」

「で、読み終えた後は」

「自分はなんてバカだったんだろうって、勝手に心を開ざして、もしかしたら足よりもっと大切なものを無くしてしまつてところだつたと初めて気がつきました」

「そうですか」

(間違いない、あの地震だ、あの時そんな事があつたんだ)

茶谷は当時の事を大切に思い出す様によつくりと話を続けた。

「地震の後、仲間たちが心配してまた来てくれたんです、僕はその知らせを聞くとベッドを出て車いすで自分からロビーへ行きました」「ようやく友達に会う勇気が出たというわけですね」「みんなは初め僕を見ると一瞬信じられないような顔をして・・・でもすぐに駆け寄つてきてくれて・・・4人来てくれたんですけど、

抱き合つて号泣しました

「どんなことをお話しされたか覚えていらっしゃいますか？」

「何を言つたのか覚えてないんですけど、『めん、『めんと謝つてばかりいましたね』

「それをきっかけにまた陸上選手を目指されるわけですが」

「高校に行き、入学の半年後に義足を作つてもらいリハビリと走る練習を始めました、中高一貫の学校だったから仲間たちとも離れることなく過ごせたんです」

「練習はどんなものなんですか」

「そりゃあ、きついですよ、山登りでいえば、みんなが緩やかな登山道を登っている時1人だけロッククライミングをしているようなもんです、足の付け根は血だらけですよ」

原田と茶谷の話のキャッチボールは続く、茶谷の言葉は驚くほどに淡々としていた。話している内容はとても重く大変な経験のはずなのに、茶谷はそれがごく当たり前のことに宥みに時折笑顔を見せながら語った。それは、計り知れない苦しみや辛さ、それらを乗り越えた人間だけが見せる事の出来る気持ちの余裕とも言えるものであつた。

気が付くとユカは泣いていた。

プロなんだから泣いちゃいけないとどれだけ言い聞かせても涙が止まらなかつた。カメラはユカに気づかれないようその姿を静かに追いかけた。

ユカは初めて声を出した、泣きながらのぐずぐずの声だった、しかし、どうしても聞いてみたいという気持ちを抑えきれずに・・・本人に気付かれないようにカメラはユカの顔をアップで映し出した。眼は真っ赤で口から出る言葉もはつきりと聞き取れない声になってしまった。

「あの・・・。」
「そんなんつうことをやり切れたんですか・・・」
グスツ・・・

茶谷はボロボロ泣いているユカに向かって優しく微笑みながら言葉をつづけた。

「夢・・かな」

「夢?」

「うん、『じ存知の通り障害者にもオリンピックがあるんです、パラリンピック、』ここで世界記録を作りたいっていうのが僕の夢なんです、その夢を見つけた時にまた中学の時の気持ちに戻ることができたんですね」

ユカは心の中で今一度自分を励ました（しつかり質問しなくちゃ）しかし、言葉がなかなか出てこない、出るのは涙ばかりだ。原田がカメラマンに田配せをしてユカをフォローするように質問を続けた。2台あるカメラのうち1台はそのままユカの姿を映している。

「今年、その1歩を踏み出すことになったわけですね」

「はい、義足での1万M競技に初めて出場できることになりました、世界記録はまだ遠い先になりそうだけど」

「きっと実現できますよ、私たちも心から祈っています」

「ありがとうございます、でも夢は遠いところにある方がむしろ楽しいかもしない、簡単にかなえられたら僕は今こんなに楽しく生きていなーと思います」

「最後にテレビを見ているみなさんにひととお願いできますか」「青臭いセリフですけど、こんな経験をした僕だから言えることがかもしれません、みなさん、夢を、そして仲間を、友達を大切にしてください」

茶谷はユ力に向けてもう一度ニコッと笑ってみせた。涙が止まらないユ力の横顔をテレビカメラは静かにそつと映し続けていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1208v/>

僕たちの挑戦

2012年1月13日21時50分発行